

複製された初版本で 日本近代文学を愉しもう (Ⅲ)¹

藤 井 哲*

太宰 治 (1909-48) : 本名津島修治。筆名辻島衆二, 小菅銀吉, 大藤熊太。

□ 『愛と美について』 (竹村書房, 昭和 14 年 5 月 20 日 : 1939) 太宰 〈函・ジ〉

*解説者: 関井光男。*旧稿の改作 2, 新作 2, 未完の長篇 1 を収録した「書き下し短篇集」で, ここでは「過剰な自意識の表現は影をひそめている」(関井)。
*太宰好みに装幀されたいが, 蔽っているパラフィン紙はジャケットのつもりなのであろう。別所直樹 (編著) 『太宰治研究文献ノート』 (圖書新聞社, 1964) p. 112 に帯文が全文掲載されているが, 太宰 の『解説書』 (p. 73) は入手するに至っていない旨を告げている。

□ 『^{あほうどり}信天翁』 (昭南書房, 昭和 17 年 11 月 15 日 : 1942) 太宰 〈ジ〉

*解説者: 保昌正夫。*昭和 10 ~ 15 年に発表されてきた文章を集める。昭和 17 年は太宰作品が多数出版された時期でもあった。本書は, 二十歳代後半の生活を反映させた随想を含んでいるので, 「この時期の太宰を知るうえで逸することのできぬ一冊」となり, 「読み進めると, 漸次, この作家の立ち直り, 腰の据わりが認められる」と解説者は指摘する。
*装幀は宮村十吉で, 初版は 5,000 部が印刷された。

□ 『ヴィヨンの妻』 (筑摩書房, 昭和 22 年 8 月 5 日 : 1947) 太宰 〈ジ〉

解説者: 長篠康一郎。「トカトントン」など短篇 7 作を収録する。なかでも「ヴィヨンの妻」では, 〴〵さつちやん。が「戦後の混迷を生きる女性のした

* 福岡大学名誉教授

¹ 本稿は、『人文論叢』第 50 巻 1 号掲載の (Ⅱ) に続く, 複製作品リスト の後半部である。

たかな生命力」を発揮させて「作者理想の女性像（無償の愛）」と目されている。しかし長篠によると、太宰の実像は夫役の大谷のように「放蕩無頼破滅型の芸術家では決してなく」むしろ倫理的な人物であった。＊装幀は林芙美子らしい。

- 『右大臣實朝』（大阪：錦城出版社，昭和 18 年 9 月 25 日：1943）**太宰** 〈ジ〉
＊解説者：保昌正夫。＊中期を代表する佳作を残したいとの思いから、太宰が『新日本文藝叢書』のために書き下ろした長篇。保昌によれば、『吾妻鏡』を踏まえながらも太宰流の虚飾の多い語りが効果を挙げている。＊装幀は藤田嗣治で 15,000 部印刷。＊大阪の増進堂が昭和 21 年 3 月 20 日に第三刷を並製 229 頁で販売したが²，表紙のデザインは錦城出版社の上製 265 頁と同じである。＊参考：津島美智子『回想の太宰治』（人文書院，1997）ちゅうの「『右大臣実朝』と『鶴岡』（pp. 191-95）。
- 『櫻桃』（實業之日本社，昭和 23 年 7 月 25 日：1948）**太宰** 〈帯〉
＊解説者：相馬正一。＊太宰の自殺後一ヶ月半で発売された短篇集で，収録 10 篇のうち「おさん」（1947）を除いた全篇が自殺の年に発表されていた。彼の「短篇小説における手練手管がこの一冊に凝縮されている」（相馬）。＊装幀は吉岡堅二。＊要注意：ほるぷ出版の『日本の文学』（1985）は複製本ではない。
- 『お伽草紙』（筑摩書房，昭和 20 年 10 月 25 日：1945）**太宰**
＊解説者：長篠康一郎。＊収録作は「瘤取り」，「浦島さん」（目次では「浦島太郎」），「カチカチ山」，「舌切雀」と題されているが，巷間の絵本と異なる物語集であると太宰は巻頭で宣している。＊題字と書名：太宰。初版 7,500 部。
- 『女の決闘』（河出書房，昭和 15 年 6 月 15 日：1940）**太宰** 〈函・帯〉
＊解説者：関井光男。＊標題作，「駈込み訴へ」，「春の盗賊」，「走れメロス」のように，古典に取材して様々な趣向を試みながら「新しく読みなおしていく」という姿勢で執筆された翻案小説をメインにした 7 篇集。＊装幀：^{いのことしお}猪子斗示夫。
- 『駈込み訴へ』（月曜荘私版，昭和 17 年 1 月 1 日：1942）**太宰** 〈和・函〉
＊解説者：鳥居邦朗。＊既発表（1940）の，「キリストを売るユダ…の思いの中に，…太宰の，前期の理想主義と訣別する複雑な心情が重ねられ」たような本

² 国会図書館は増進堂版を昭和 17 年初版と記述しているが，幻の初版ではなかろうか。

作が、「太宰自身の美意識でつくられた唯一の和装豪華本」に仕立て直された。

* 原本は 300 部限定の私家版で、第 1 ～ 150 番が茜色の表紙、第 151 ～ 300 番では青色であった。今回「太宰」セットが複製した底本は、太宰家より寄贈された青表紙本であった。* 出久根達郎（2007）は、「小色紙大の、毛筆識語入りの紙片が付いているんだけど、太宰の肉筆だから、これだけを外して飾る人が多いんだ」（p. 77）と業界人ならではの知見に触れて、「この本は太宰治著作の完全収集をねらう者にとって、難物中の最難物」（p. 69）と教えてくれているが、その「紙片」とは「太宰」版の畳紙に貼付されている短冊のことであろうか。

□ 『佳日』^{かじつ}（肇書房，昭和 19 年 8 月 20 日：1944）「太宰」

* 解説者：保昌正夫。* 1941 年以降に発表してきた短篇を集めており、「水仙」を除く 9 篇すべてが初めて単行本に収録された。友人で評論家の山岸外史^{がいし}は「すなおで美しい作品である。描写もしずかにゆきとどいており、心境も澄んできている。」と評した。* 山内祥史^{やまのうちにし}の書誌（1992）は装幀者を井出則雄とし、カバー附と記述（p. 398）するが「太宰」は複製していない。初版は 5,000 部印刷。

□ 『風の便り』（利根書房，昭和 17 年 4 月 16 日：1942）「太宰」 〈ジ〉

* 解説者：鳥居朗邦^{くにお}。* 『千代女』前後の 8 短篇を集める。半数が再録作品ながら、「此の機会に再讀なさつても、十分に新鮮の感じがするやうに、心掛けて編輯した」（あとがき）と、太宰が読者に手招きする。* 装幀：安部合成^{ごうせい}。

□ 『虚構の彷徨 ダス・ゲマイネ』（新潮社，昭和 12 年 6 月 1 日：1937）

「太宰」 〈帯〉

* 解説者：関井光男。* 「新選純文学叢書。— 5. 「虚構の彷徨」は、それぞれが真・善・美を象徴する「道化の華」・「狂信の神」・「虚構の春」の「三部曲」によって構成された。また、書名が津軽弁の「ン・ダスケ・マイネ。（だから嫌）に由来すると井伏鱒二が種明かしした手記「ダス・ゲマイネ」と併せて、太宰はこの第二創作集で「メタ言語による小説の可能性を追求し」、従来の「小説のリアリズムを解体」（関井）しようとしたらしい。* 装幀：向井潤吉。

□ 『細胞文藝』創刊號（細胞文藝社，昭和 3 年 5 月 1 日：1928）「太宰」^付

* 解説者：相馬正一。* 「弘前高校在学中に同人誌として太宰自身が発行し、本格的な創作活動の出発」とした純文藝雑誌。辻島衆二（津島修治）が主たる

出資者となり、「無間奈落」（未完）その他を執筆し、装幀もこなした。船橋聖一や井伏鱒二からも寄稿を得ていたが、同年9月の第4号で廃刊となった。

- 『地主一代』（八雲書店、昭和24年4月15日：1949）〔太宰〕 〈帯〉

＊解説者：相馬正一。＊副題に「未発表作品集」とあるように、弘前高等學校～東京帝國大學一年の時期に同人誌『細胞文藝』、『校友會雜誌』、『座標』に発表したままになっていた「無間奈落」（未完）など習作6篇を集める。＊装幀：豊口克平^{かつへい}。＊八雲書店版『太宰治全集』の第18巻に「未発表作品集」として予定されていたが、版元が1950年に倒産して全集としては未刊行になった。

- 『斜陽』（新潮社、昭和22年12月15日：1947）〔太宰〕

＊解説者：相馬正一。＊『新潮』の1947年7～10月号に連載され、完結直後に単行本化された。相馬は、「前半に第一主題を据えて〈没落への挽歌〉を奏でながら、後半の第二主題で〈生への讃歌〉へと変奏する構成になっている」こと、そして「ヴィヨンの妻」のゝさつちやんのしたたかな生命力～『斜陽』におけるゝかず子の生への意欲～作者自身の処世術との繋がりを指摘する。＊初版10,000部。＊貴族が真に描かれていないと上流階級出身の志賀直哉は批判したが、半年後に太宰が自殺したこともあって本書が注目され、ゝ斜陽族、という言い回しが流行し始めた。＊日本図書センター版『太宰治文学館：斜陽』（2002）は現代仮名遣いによる再刊。

- 『女性』（博文館、昭和17年6月30日：1942）〔太宰〕 〈ジ〉

＊解説者：鳥居邦朗。＊本心をカムフラージュするための他者すなわち女性を語り手にした独白体の小説を9篇集めるが、そのうち5篇は再録であった。＊装幀：安部合成^{ごうせい}。初版5,000部。＊『解説書』（p.72）にはジャケットをセロファンが蔽っていると記されているが、版元の日本近代文学館に問い合わせたところ、〔太宰〕にはセロファンのようなものは見られないとの回答であった。

- 『女生徒』（砂子屋書房、昭和14年7月20日：1939）〔太宰〕

＊解説者：関井光男。＊初期作品には太宰の韜晦な自意識が旺盛であったらしいが、本書は彼の作風が中期文学へ転換した頃の「富嶽百景」や「懶惰の歌留多」など7短篇を収録する。＊装幀は山田貞一で、初版は2,000部印刷。＊日本図書センター版『太宰治文学館：斜陽』（2002）は現代仮名遣いによる再刊。

□ 『新釋諸國噺』（生活社，昭和 20 年 1 月 27 日：1945）太宰

*解説者：保昌正夫。*本書「凡例」の告げるところでは、「世界でいちばん偉い作家」である井原西鶴の作品を 12 篇選んで，現代語訳ではなく「勝手に空想を按配し…いささか読者に珍味異香を進上しよう」との意図から小説化したらしい。1945 年には『お伽草紙』も刊行されていたことから，太宰の性に合った手法なのであろう。*初版だけで 10,000 部が印刷された。彼の著作のなかでも生前に最も広く読まれた一冊で，1947 年までに第四版を数えていた。*参考：津島美智子（1997）ちゅうの「『新釈諸国噺』の原典」（pp. 196-98）。

□ 『新ハムレット』（文藝春秋社，昭和 16 年 7 月 2 日：1941）太宰 〈ジ〉

*解説者：鳥居邦朗。*本書「はしがき」で太宰は，坪内逍遙訳や浦口文治著『新評註ハムレット』（三省堂，1932）を読んでから，lesedrama（読むための戯曲）として小説風に書いてみたので，原作と「比較してみると，なほ，面白い発見をするかも知れない」と読者に期待させる。いっぽう鳥居の解釈では，太宰が「ハムレットに託して，これまでの自分を批判的に」描いているらしい。

□ 『正義と微笑』（大阪：錦城出版社，昭和 17 年 6 月 10 日：1942）太宰 〈ジ〉

解説者：鳥居邦朗。「戦時下，現代小説を書いて自己を主張するのは至難」であったため，実在の歌舞伎役者が記した昭和 12～14 年の「日記を材料にして，太宰のテーマを込め」た日記体で書き下ろされた。日記初日に書き込まれる「微笑もて正義を爲せ！」のモットーには，聖戦を振りかざす世間への当て付けが込められていた由。*装幀は藤田嗣治で，初版は 10,000 部印刷された。

□ 『惜別』（大阪：朝日新聞社，昭和 20 年 9 月 5 日：1945）太宰

*解説者：長篠康一郎。*表紙が「傳記小説 惜別」，扉が「惜別 醫學徒の頃の魯迅」となっている書き下ろしの長篇。内閣情報局と日本文學報國會より委嘱された魯迅伝は，まさに太宰が「材料を集め，その構想を久しく案じてゐた」（あとがき）主題そのものであった。*装幀は清水茂郎で，初版は 10,000 部印刷。*参考：津島美智子（1997）ちゅうの「『惜別』と仙台行」（pp. 199-202）。

□ 『千代女』（筑摩書房，昭和 16 年 8 月 25 日：1941）太宰 〈ジ〉

*解説者：鳥居邦朗。*1941 年前半に執筆された 7 短篇集で，ユーモアと時局へのささやかな当て擦りとを潜ませる。但し，頁数で本書の 4 割を占める「ろ

まん燈籠」は前年からの連載物で、性格を異にする五人の兄弟姉妹が一篇の物語を書き継ぐという、太宰好みである「小説を書く小説」の手法が試みられている。＊装幀は安部合成^{ごうせい}で、題簽は太宰による揮毫。

- 『津軽』（小山書店，昭和19年11月15日：1944）太宰
- ＊解説者：保昌正夫。＊『新風土記叢書』の第7巻でありながら、津軽案内というよりも、都会人であることに不安を覚えた太宰が自分の『ふるさと』を取り戻そうとした巡礼の旅として小説化されている。太宰自身が描いた挿画も5点収録されている。＊初版3,000部。＊小山書店が再刊したのは彼が自殺した1948年の10月20日であったから、同じ紙型を用いたのであろう。また『津軽』（青森：津軽書房，1976）は、正字を用いて活字を組み直した『復原版』。＊日本図書センター版『太宰治文学館：斜陽』（2002）は現代仮名遣いによる再刊。
- 『東京八景』（實業之日本社，昭和16年5月3日：1941）太宰 〈ジ〉
- ＊解説者：関井光男。＊葛原勾当の日記から翻案した「盲人獨笑」など、原稿依頼が増え始めた1939年末頃に執筆された5篇の小説に、旧作を改筆した「HUMAN LOST」と「ロマネスク」を加える。そして、それぞれの作品は「青春の喪失と反俗精神」（関井）というモチーフで通底する。＊装幀は小磯良平。
- 『二十世紀旗手』（版画荘，昭和12年7月20日：1937）太宰 〈帯〉
- ＊解説者：関井光男。＊『版画荘文庫』—4。「生れて、すみません」と副題された「二十世紀旗手」，「雌に就いて」および「喝采」からなる短篇集で、「語ることを対象化した語りの自意識」を重奏化させながら描出するという手の込んだ手法を潜ませた作品群を成すと関井は解説する。
- 『如是我聞』（新潮社，昭和23年11月10日：1948）太宰
- ＊解説者：相馬正一。＊1940年3月～48年8月に発表された随筆・序文・跋文などを14篇を集めて没後に刊行された。「誰がどんな意図で選んだかは詳かでない」らしいが、話題を呼んだのは「如是我聞」（1948）で、「志賀直哉に象徴される〈虚妄の権威〉に対する抗議」が意図されていた。なお、「如是我聞」，「豊島與志雄のこと」，「井伏鱒二のこと」の3篇は口述筆記された。
- 『人間失格』（筑摩書房，昭和23年7月25日：1948）太宰/CatH 〈帯〉
- ＊解説者：相馬正一／東郷克美。＊自らの心情に従って生きようと努めるが周

囲からは廢人視される主人公を描くことで、近代の合理主義を批判しようとした長篇。『日本近代文学図録』（1964）によると、「三月から五月にかけて書き、六月に死んだ。アウト・ロウの文学としての最後の烈しい燃焼がみられる」（p. 334）そうである。＊併載の「グッドバイ」では、「離別百態を描いたユーモア小説」が構想されていたが、太宰の自殺で絶筆になった。白井吉見が「あとがき」を寄せている。＊装幀：^{くらたてつ}庫田焄。＊日本図書センター版『太宰治文学館：斜陽』（2002）は現代仮名遣いによる再刊。＊要注意：ほるぷ出版の『日本の文学』（1985）は複製本ではない。＊参考：えくらん社が『肉筆版選書』で1958年9月20日に原稿を1,000部複製していたが、2008年11月19日に集英社が『直筆で読む「人間失格」』で全頁の原稿を縮小して1,400円＋税で提供した。

□ 『薄明』（新紀元社，昭和21年11月20日：1946）太宰

＊解説者：長篠康一郎。＊7短篇と「隨筆一束」を収める。なかでも長篠は、太宰が疎開先で遭遇した1945年7月6～7日の甲府大空襲という原体験を誇張せずに描写した「薄明」を重要視して、津島美智子（1997）を太宰の実像を理解するための必読文献であることを強調する。＊装幀：若山^{ためぞう}為三。

□ 『パンドラの匣』（仙台：河北新報社，昭和21年6月5日：1946）太宰

＊解説者：長篠康一郎。＊太宰の愛読者木村庄助から遺贈された結核療養の日記に取材して1943年に執筆されたまま未発表になっていた「雲雀の声」を転用した作品。故人が親友に宛てた「手紙の形式はまた、現実感が濃い」との期待から、1945年10月開始の太宰にとっては初めての新聞小説でこの形式を試みた。＊装幀を引き受けた恩地孝四郎が13点のカットも描いた。＊参考：津島美智子（1997）ちゅうの「『パンドラの匣』が生まれるまで」（pp. 203-206）。

□ 『晩年』（^{まさごや}砂子屋書房，昭和11年6月25日：1936）

昭和精選／太宰／SONY 〈帯〉

＊解説者：奥野健男／関井光男／三浦雅士。＊『第一小説叢書』のうち。＊奥野によると、「昭和10年前後は近代の終焉意識から発した大正末期からの新しい文学運動であるプロレタリア文学と新感覚派の文学が共に挫折し、現代文学への模索が若い作家によってなされはじめた画期的な時代」で、その頃に執筆された中短篇15作を収めて太宰には最初の単行本であった。「死を意識したぎ

りぎりの自己告白、自己主張でありながら、作品は明るく、新しさに満ち、現代文学のさまざまな可能性をはらんだ創作集」（内容見本）として、当時の読者に鮮明な印象を与えた。例えば「逆行」が第一回芥川賞候補作品に選ばれたこともあって、本書は「それからの太宰治文学のサンプル」集とも目された。

＊初版は売価2圓で600部が刷られたが、帯の広告には佐藤春夫と誤植されている。＊1966年10月1日に大和書房が、浅見淵^{ふかし}筆の解説（4頁）と竹製ペーパー・ナイフを添えて、佐藤春夫と訂正した帯で「初版本準拠版」を販売（1,200円）した。今回の複製では、大和書房版を参照しつつ、誤植を旧に復している。

＊要注意：ほるぷ出版の「日本の文学」（1985）は複製本ではない。

□ 『皮膚と心』（竹村書房、昭和15年4月20日：1940）太宰 〈函〉

＊解説者：関井光男。＊太宰が「最近の愛情深い作品」と考えた清澄でユーモラスな14篇を収録する。しかし関井によると、「そのユーモアの底に空虚さ」を残しており、標題作にも「女性のユーモラスさと底知れぬ悪魔さが厭味なく浮かび上がってくる」由である。＊太宰は竹村担に「瀟洒」な装幀を依頼した。

□ 『富嶽百景』（新潮社、昭和18年1月10日：1943）太宰

＊解説者：保昌正夫。＊「昭和名作選集」の最終巻（28）で、「序」以外はすべて既刊書からの再録であった。つまり、この8短篇が昭和の名作として認知されたとも考えられる。巻末の「解説」で亀井勝一郎は、太宰を「小説がなほ文学の眞面目を失はなかつた日の、最後の人であるかもしれない。そして同時に、何ものかの最初の人であるかもしれぬ。受難の刻印は免れないであらう。」と評価し意味深な予言をしている。＊初版では12,000部が印刷された。

□ 『冬の花火』（中央公論社、昭和22年7月5日：1947）太宰

＊解説者：長篠康一郎。＊1946年発表の三幕悲劇「冬の花火」は、太宰が「劇界、文学界に原子バクダンを投ずる意気ごみ」で執筆した、初めての戯曲であった。もう1曲の「春の枯葉」と共に、各地で上演されるようになった。それに短篇3作と、「津軽通信」とが本書に集められた。＊装幀：佐藤美代子。

立原 道造（1914－39）：

筆名山木^{あきひこ}祥彦。

□ 『萱草に寄す』^{わすれぐさ}（風信子叢書刊行所、昭和12年5月12日：1937）昭和/連翹^{ヒヤシンス}

*解説者：猪野謙二 / 吉田^{ひろお}熙生。*第一詩集。「日本浪漫派の勃興期」につながる昭和10年代に、プロレタリア文学や自然主義的作風とは対極の、「空幻の花さながらの純粋時間と人工美の世界を構築」（猪野）したような4-4-3-3行というソネット詩型で恋を詠った10曲集。吉田によると、人間が「物・化される危機を捉えきれなかったモダニズムの限界を、立原が「精神と自然…との関係に移し、これを可能な限り純粋な形式あるいは語感として表現」することで克服しようと試みて功績があった。*日本橋の自宅を版元にして自選・自装した非売の私家版。印刷所からの納入が遅れて、7月18日頃に100部が出来上がった。別に特装本も11部あった由。*日本図書センターが1999年に「愛蔵版詩集シリーズ」で「初刊のデザインの香り」を新字体で再現しようとした。

谷崎 潤一郎（1886-1965）：

- 『異端者の悲み』^{オランダ}（阿蘭陀書房、大正6年9月15日：1917）秀選 〈函〉

*解説者：保昌正夫。*収録された4篇すべてが大正6年に雑誌で発表された作品。本書の過半を占める「異端者の悲み」について、谷崎は「序」において、「予が唯一の告白書にして懺悔録なり。…最も忘れ難く、最も感慨深きものは實に此の一篇なり。その頃の醜かりし自己、哀れなりし自己、さては自己を取り巻く兩親骨肉の涕を、此の書に依りて想起する毎に、予は常に戦慄と落涙とを禁ずる能はず。」との心境を吐露している。*参考：自筆原稿が、2011年10月に日本近代文学館によりDVD2枚で公刊（45万円）された『滝田栲陰旧蔵近代作家原稿集』に収録されているらしい。

- 『刺青』^{しせい}（昶山書店、明治44年12月10日：1911）

明後新選珠③/SONY/CatH 〈函〉

*解説者：伊藤整 / 保昌正夫 / 河野多恵子 / 川本三郎。*明治43～44年に発表された7篇を集めた、谷崎にとっては第一短篇集であり出世作ともなった。彼は「自然主義文学の暗さと平板さに反撥して」、写実偏重とは反対の方向に進み、永井荷風よりも「更により濃厚な美意識と反道徳的な享楽思想」を追求して、谷崎作品は荷風から「芸術の一方向を開拓した」と称されるまでになった。また保昌によれば、将にこの「刺青」にこそ「嘆美の作家。としての谷崎

の出発点があったことになる。＊装幀：橋口五葉による胡蝶本（脚注13参照）。

□ 『春琴抄』（大阪：創元社，昭和8年12月10日：1933）

〔昭和〕〔精選〕〔珠③〕 〈函〉

＊解説者：円地文子。＊女性の精神面ではなく肉体美に固執する男を描いてきた谷崎が、「天才美女春琴…の無慚な変貌を見まいとして、われとわが目を突いて」法悦の境地に入る奉公人の佐助を描いた中期の傑作。＊この頃の谷崎は、「この三四年来自分の本の装釘は自分が考へることにして、新しい出版をする毎に本の出来上がるのを楽しんで」いたようである。もっとも壽岳文章は、『書物とともに』（富山房，1980年3月27日）所収の「作家と装幀」（1934）で、装幀を漆仕上げにした谷崎の趣味を酷評している（pp. 153-65）。³ ＊〔昭和〕では朱漆が塗られた表紙に金蒔文字の装幀が忠実に再現されている。その後の〔精選〕では鏡のような黒漆本が底本とされ、〔珠③〕で再び朱漆版が複製されている。但し八木福次郎（1991）が伝えるには、「著者は朱色の方を嫌って署名を頼んでもしなかった」（p. 197）そうである。＊参考：1970年6月30日に中央公論社が『春琴抄：自筆原稿複製』を500部制作しているが、28,000円であった。＊要注意：ほるぶ出版の『日本の文学』（1985）は複製本ではない。

□ 『蓼喰ふ蟲』（大阪：創元社，昭和11年6月15日：1936）〔昭和〕 〈和・函〉

＊解説者：佐伯彰一。＊当時のプロレタリア文学とは対照的に、「臆面もなく享乐的，趣味的，反動的な『蓼喰ふ蟲』ばかりが，依然としてみずみずしい生氣をたもって…日本の現代小説の代表的な名作として，さらには日本文化理解のための最良の入門書の一つ」となり得ていることに佐伯は瞠目する。＊単行本としては昭和4年（1929）年11月に改造社から出されていたが，〔昭和〕で複製されたのは創元社（大阪）が昭和11年6月15日に『潤一郎六部集』の第一集として370部限定で販売（10圓）した豪華本。19枚ある別丁挿絵は小出柘なら重しげによるもの。装幀者は谷崎自身であろう。⁴ ＊複製にあたっては，特漉和紙を大和綴じにするなどして，原本の雰囲気を再現するために途方もないコストが

³ 『装丁』（1998）の谷崎筆「装釘漫談」。壽岳について大貫伸樹（2003）に教えられた。

⁴ 『装丁』（1998）所収の「装釘漫談」で谷崎は，縦書きの行が短くなって読みやすいよう横長判にして，しかも片手で丸めやすい和紙による装幀をこの時期に提唱していた。

掛かってしまい、〆金喰う虫。とぼやかれること頻りであつたらしい。

- 『盲目物語』（中央公論社，昭和7年2月5日：1932）**〔特選〕** 〈函〉

＊解説者：酒井森之介。＊関東大震災（1923）を契機に関西に移住し，上方文化に触れたことで「自己の浪漫的資質の究極の住みかを見い出した」谷崎が1930年頃に執筆した4篇の集。全丁数の6割を占める「盲目物語」は，信長の妹お市とその遺児お茶茶の身の上を三味線弾きの盲人が回顧する設定で，按摩をしながらの触感に女性美を想像する効果が試されている。＊横綴じ和洋折衷の贅沢な装幀は菅橋彦による。題字は根津松子（丁未子の次^{とみ}の谷崎夫人）。

種田 山頭火（1882－1940）：

本名正一。

- 『柿の葉』（広島：私家版，昭和12年8月5日：1937）**〔種田〕** 〈和・ジ・挿〉

＊解説者：瓜生敏一。＊第五句集。折り本仕立ての本書には，木村緑平による同題の『柿の葉』が裏面に印刷されている。山頭火が出版の度に「他人の牛蒡^{ごぼう}で法事をする」（跋）のを心苦しく思っていたので，費用を木村に負担させる口実としての併載であった。木村も発行者の大山澄太^{すみた}も，山頭火が師事していた荻原井泉水主宰の句誌『層雲』で同人だったからである。＊第四句集まで明示されていた売価が本書で奥付から消えて，大山の名義で「…此の句集を送つて貰はれた御方は其中庵慰問袋^{きちゆうあん}として酒なら一升，米なら二升を御恵投下さる様念じ入ります。」と印刷した紙片が挿み込まれている。

- 『鴉雀』（広島：私家版，昭和15年7月25日：1940）**〔種田〕** 〈和〉

＊解説者：瓜生敏一。＊私家版としては最後になった第七句集。やはり折り本仕立てで，裏面には木村緑平の『雀』が印刷され，跋文に「緑平老の句集に便乗させてもらつた」とある。＊200部のみ制作された。但し，今回は袋に入られていない。＊奥付に「（舌代）山頭火翁供養として米二升，酒一升又は赤味噌一貫目等を物納の人に此の句集を贈呈します。…一草庵宛」が見られる。

- 『孤寒^{こかん}』（広島：私家版，昭和14年1月25日：1939）**〔種田〕** 〈和・ジ〉

＊解説者：瓜生敏一。＊折り本仕立ての第六句集。跋文に「孤寒^{こかん}といふ語…が表現する限界を彷徨してゐる。私は早くさういふ句境から抜け出したい。」とある。＊奥付には非売品とあり，発行所が大山澄太^{すみた}方「杖社」となっている。

- 『雑草風景』（廣島：私家版，昭和 11 年 2 月 28 日：1936）〔種田〕 〈和・ジ〉
*解説者：瓜生敏一。*第四句集で，折り本仕立て。跋文には「其中庵風景で
あり，そしてまた山頭火風景である。」と記されている。
- 『山行水行』^{すいこう}（廣島：私家版，昭和 10 年 2 月 28 日：1935）〔種田〕 〈和・ジ〉
*解説者：瓜生敏一。*第三句集，折り本仕立て。昭和 8 年 8 月～翌年 10 月
に詠まれた約 2,000 句から 141 句を選んで，両面に印刷している。
- 『草木塔』^{そうもくとう}（廣島：私家版，昭和 8 年 12 月 3 日：1933）〔種田〕 〈和・ジ〉
*解説者：瓜生敏一。*山頭火が師事していた荻原井泉水主宰の句誌『層雲』
で同人の大山澄太^{すみた}が，300 冊分の手漉き和紙を出雲から取り寄せて，広島で印
刷した折り本仕立ての第二句集。山頭火の「よろこびは一方ならず…」だった
ので，それ以後は大山が私家版の印行を段取りするようになった。*日本図書
センターが新字体で「初刊のデザインの香り」を再現しようとした^{きょうこつ}愛蔵版句
集シリーズ。に『草木塔』（2000）があるが，その底本は，私家版 7 点より 701
句を自選して八雲書林から 700 部のみ公刊した『草木塔』（1940）の方である。
- 『鉢の子』（福岡：私家版，昭和 7 年 6 月 20 日：1932）〔種田〕 〈和・ジ・挿〉
*解説者：瓜生敏一。*山頭火の第一句集。やはり折り本仕立ての別冊『解説』
によると，大正 14 年（1925）から 7 年間の行乞流転^{ぎきうこつ}の結晶である 180 句のう
ち 88 句を師である荻原井泉水が選んでおり，「経本のやうな折本仕立にしては
どうか」との井泉水の提案にも応えるかたちで，句誌『層雲』での同人木村緑
平が尽力して私家版として発行された。ところが当人の感想は，「こいつ黄な
紙に赤い罫が入っていて，あまり坊主くさくて困る，それに活字も古く，誤植
もあって…」と，頻りに腐していたらしい。*挿み込まれていたガリ版刷りの
「正誤表」も，〔種田〕では忠実に複製されている。

田山 花袋（1871－1930）：

本名録彌^{ろくや}。

- 『田舎教師』（左久良書房，明治 42 年 10 月 20 日：1909）

〔明後〕〔新選〕/〔SONY〕 〈函〉

*解説者：川副国基^{くにもと}/十川信介。*マンネリ化していた硯友社文学とは訣別
し，雑誌『文章世界』を主宰することで自然主義文学を推進しつつあった花袋

が、実在の小学校教師の日記に取材して、志が遂げられずに鬱屈していく青年林清三の心情を「現実のありのままをそのままに描く」手法で書き下ろした長篇。教師を主人公にしていたことから、当時においては、藤村の『破戒』（1906）と共に読まれていた。＊『近代文学名作事典』（1967）が示した「孤独な主人公の姿は熱心に迫っているが、病気が重くなってからの心理に及ぼす生理の影響などは、あまり注意していない」という指摘は、大方の読後感を代弁しているであろう。＊装幀は斎藤松洲^{しょうしゅう}により、口絵は岡田三郎助が描いた。＊要注意：ほるぷ出版の『日本の文学』（1985）は複製本ではない。

- 『小さな鳩』（實業之日本社、大正2年3月23日：1913）児②
- ＊解説者：瀬沼茂樹。＊郷里館山での少年時代から14歳で「鳩のやうに眼を丸くして」上京するまでの出来事を、省略や虚構も交えながら語った自伝風の少年向け人生物語。同じ自然主義作家藤村による『眼鏡』（1913）に続いて、^{あい}愛子叢書^しの第二編として出版された。＊装幀と挿絵を川端龍子^{りゅうし}が担っている。
- 『時は過ぎゆく』（新潮社、大正5年9月5日：1916）精選 〈函〉
- ＊解説者：野口富士男。＊近親のみじめで暗い生活を通して、過去半世紀間における「流れゆく時のなかに人生の生死離合を諦観する花袋の新生哲学」が自伝風に描き出されて、彼の「文学的円熟期の頂点に立つ秀作」と目されている長編小説。＊^し私小説^しをスタートさせた花袋の「蒲團」（1907）が『破戒』（1906）に擬されたように、本作は藤村の『夜明け前』（1929～35）に比せられた。

近松 秋江^{しゅうこう}（1876－1944）： 本名徳田浩司。

- 『黒髪』（新潮社、大正13年7月15日：1924）大正 〈函〉
- ＊解説者：吉田精一。＊「空想力に貧しく…したがって告白に生きる作家であった」秋江が自らの体験と性格とから生み出した、「全く心のはなれた女性に対する悪魔のよう」な痴情と執着の物語に仕上がっているのであるが、取り乱しているはずの「作者の描写はとり乱していない」ところに、この中篇を「余人の追隨をゆるさない逸品」に押し上げるメリットになったと吉田は賛嘆する。

千葉 省三 (1892-1975) :

- 『トテ馬車』 (古今書院, 昭和4年6月5日:1929) 児①児選 〈ジ〉
*解説者:^{むこがわ}向川幹雄。*郷土童話を目指した千葉による第一童話集で、書名は「郷里を朝夕往復した乗合馬車のラッパの音」に由来するらしい。則ち日本の風土の中で生き生きしている子供を捉えて彼等の抱く価値観を描き出して、大正～昭和初期における児童文学作品の頂点に立ったが、その童心讃美の作風故にプロレタリア児童文学の側から激しく攻撃された時期もあった。しかし後年になって、所収の「虎ちやんの日記」が注目されたのを切っ掛けに再評価の気運が高まった。*装幀・口絵: 川上四郎。初版は500部印刷。
- 『ワンワンものがたり』 (金蘭社, 昭和4年12月15日:1929) 児② 〈函〉
*解説者: 関英雄。*きんらんゑばなし叢書。第二編。*千葉の第二童話集で、子どもの心に移し植えられた犬が*自然なユーモア。たっぷりに描かれた12の小品を集めて、「日本最初の…創作幼年空想物語として、画期的な意義をもつ」と高く評価された。*装幀と挿絵が千葉の僚友川上四郎という、こうした名コンビならではの傑作。初版は500部印刷。*「わくわく! 名作童話館」(日本図書センター, 2006)での復刻は文字遣いや装幀が現代化されている。

塚原 健二郎 (1895-1965) :

号子竹。

- 『七階の子供たち』 (子供研究社, 昭和12年4月20日:1937) 児① 〈函〉
*解説者:^{おおふじ}大藤幹雄。*島崎藤村に師事し、『赤い鳥』に*童心主義的児童文学、を書いていたが、プロレタリア児童文学派に影響されてからは、児童の集団的生活における自主的・創造的・行動的生活を助長する作風に転じていった。本書はそうした彼の第一童話集で、実践的理想主義の道を邁進しつつも当時のスケッチ風な*生活童話。を超えて、作者の身分が作品に登場して詩と夢を分ち合うという手法が試みられていた。*装幀および挿絵は深澤省三による。

土屋 文明 (1890-1990) :

- 『ふゆくさ』 (古今書院, 大正14年2月28日:1925) 山茶 〈函〉
*解説者: 米田利昭。*女学校教師の重圧→小説家への志→文学研究者への転

向という経歴を歩んだ文明に、「生活をとりにこむことで現実味の勝った写実的かつ芸術的な歌」を希求させ、彼を「昭和期における強いリアリズムによる社会詠」の歌人として大成させる機縁となった第一歌集で、明治42年（1909）～大正13年に『アララギ』に発表してきた380首を収める。＊装幀は平福百穂^{ひゃくすい}。

壺井 栄（1899－1967）：

旧姓岩井。

□ 『夕顔の言葉』（紀元社、昭和19年2月20日：1944）児①児選 〈ジ〉

＊解説者：横谷輝。＊9作品を収録する、彼女の第一童話集。横谷は、「その文学の特質は、郷土の小豆島を背景にして、そこに生きる庶民の健康であかるい心情や生活を、ごく自然にかつ独特の語り口でもって表現したところにある」と解説する。＊初版本と後年の流布本とでは本文の異同がかなりあるらしいから、対照用資料としても有益であろう。＊装幀および挿絵は松山文雄による。

坪内 逍遙（1859－1935）：

本名勇藏→雄藏。筆名春廼屋^の朧^{おぼろ}他。

□ 『家庭用児童劇』（早稻田大学出版部、大正11年11月4日：1922）

児① 〈函〉

＊解説者：富田博之。＊教育に強い関心を抱くいっぽうで、「歌舞伎の革新や新劇運動にも、思うような成果がえられず、挫折したあと、晩年の三年足らずに限られた」活動が、大正10年以来試みてきた児童劇を介した家庭の藝術化であった。それで本書刊行の月には、指導してきた帝國劇場附属の技藝学校生を有楽座の舞台に立たせて上演している。＊好評であったため大正13年までに同書の第三集まで執筆したが、家庭より学校に可能性を見出した逍遙は、大正12年末に同じ版元から『学校用小脚本』も出版しており、この時期にわが国の演劇教育運動を盛り上げる功績を遺した。＊挿画：宍戸^{さこう}左行・小川治平。

□ 『小説神髓』第壹冊～第九冊（松月堂、明治18年9月～19年4月：

1885～86）明前精選 〈和・挿〉

＊解説者：稲垣達郎。＊勸善懲惡の道德観に縛られることのない西洋流小説様式についての認識不足を自覚した逍遙が、「参考書は主として英國文學史（著者の名はよく記憶せざれど）二三種、雑誌はContemporary Review, Nineteenth

Century, The Forum のたぐひ…」⁵を頼りに起筆して、「秩序をもって組織され、体系づけられ」た本邦初の小説論に仕上げた。本書において小説を「最も成長した段階の形態であるとし、小説の芸術上、文化上の地位を明らかにした」として『近代文学名作事典』（1967）は評価しているが、稲垣は本書でのような「前近代的文学論としかみられない理解は、権威とはなり得ない」と厳しい。＊上下巻で刊行するはずの版元が傾いたので、印刷済みを松月堂が譲り受けて9分冊（第三冊にのみ刊記あり）にして発行した。そのため各丁の柱に東京稗史出版社と刷り込まれたままになっている。完結の翌月に松月堂が上下2冊にして再刊したが、稀覯性のある9分冊版が複製された。＊当時の技術の未熟さから表紙に残った馬棟擦れも、現代の和本職人の技術で忠実に再現するという凝り様であった。なお、合本版で付された二つ折り一枚の「正誤表」が今回の複製では第九冊に挿み込まれている。

□ 『當世書生氣質』 第壹號（晚青堂、明治18年6月：1885）

〔明前〕^付〔新選〕〈和〉

＊解説者：稲垣達郎。＊『小説神髓』で開陳するはずの西洋流小説作法を実作でアピールする要を感じた逍遙は、^{つのがき}角書に「一讀三歎、とある通りの意気込みで4月に起筆し、翌年1月には最終の第二拾回（全17分冊）に漕ぎ着けていた。＊昼飯はバック〔buckwheat 蕎麦〕と英語由来の学生符牒を多用し、ナイフはナ〔無〕イフのような駄洒落も厭わず、太田道灌を「にはかあめ」と読ませる捻りも効かせて、文面上は賑やかである。しかし逍遙にしてみれば、「理論の半分をも実際にはほとゝ行ひ得ざる」（序）との歯痒さを払拭できず仕舞いで、第二拾回では登場人物に「まるで赤本の結局的やうだ」と言わせている。稲垣も、上野の戦争で生き別れになった父子兄妹が再会するという「ひどく古風な筋に、各種書生の生活がからまって、書生風俗絵巻が展開される」程度の内容で、主人公の存在感は希薄ではあり、「理論ほどには遂げられなかった実践」と評している。＊初号の浮世絵風な口絵と挿絵は歌川國峯による。本作品〔明前〕

⁵ 木村毅の問合せに対する逍遙の回答で、木村の『明治文學展望』（改造社、1928年6月28日）に引用されている（pp. 82-83）。ちなみに筆者（藤井）は、『人文論叢』の第48巻4号に「木村毅と英文学」を投稿して、そのなかで逍遙にちょっと触れている。

では付録とされ、**新選**に再登場しながらも、「技術上の諸事情」で第壹號（＝第壹回）しか複製されなかった。＊参考：宮沢章夫（編）『明治の文学 第4巻：坪内逍遙』筑摩書房 2002年9月25日。第二拾回までを脚注付きで収録する。

坪田 譲治（1890－1982）：

□ 『子供の四季』（新潮社，昭和13年8月11日：1938）**昭和** 〈函〉

＊解説者：藤田圭雄。＊お馴染みの「善太，三平の行動を通して，人生を描き，社会を覗ようと」する坪田は，定型的な背景人物との取り合わせに相乗効果を引き出しながら，「真剣に，その一生をかけて，子どもを文学の中で生かそうと努力した作家」であった。同様に，「死…に対し，子どもという，活動的な，明るいものを浮き出させる」という相乗効果に彼の文学の秘密があると藤田は指摘する。＊装幀は小穴隆一。初刷は3,500部印刷で，その年の内に9,000部まで増刷された。＊**昭和**で複製するにあたり底本が坪田本人から提供された由。

□ 『坪田譲治集』（大阪：湯川弘文社，昭和14年9月5日三版：1939）

見② 〈函〉

＊解説者：向川幹雄。＊坪田が文筆で生活を支えるのに苦労した昭和9～11年に執筆してきた童話から，年少の読者に「艱難の多い現実を見せることと，おおらかな空想の世界を見せること」を意図して15篇が収録された。奥付が第三版なのは，判型と装幀を改める以前の書名『をどる魚』から通算したため。

□ 『魔法』（健文社，昭和10年7月5日：1935）**見①****見選** 〈函〉

＊解説者：鳥越信。＊菊池寛名義の再話物『源平盛衰記物語』（興文社，1927）から数えたら坪田の2冊目の児童書であったが，創作童話としては第一集になる。すなわち，『赤い鳥』に発表してきた40余篇から善太・三平兄弟の話を中心に16篇を選び，別に1篇を加えている。＊装幀と挿絵は深澤省三。しかし初刷では深澤を記名し忘れたまま印刷されて，後日名票が貼り込まれた。

デヴィソン（1843－1928）＆スタウト（1838－1912）：

□ 『讃美のうた』（長崎，明治6年末～7年前半：1873～74?）**紫陽**^付 〈和〉

＊解説者：原恵。＊長崎のメソジスト派宣教師 John C. Davison と改革派宣教

師 H. Stout が、それぞれ飛鳥健治郎と瀬川浅^{あさし}を助手に、既に横浜や神戸で日本語化されつつあった讃美歌も取り入れながら、「日本語でうたえるように翻訳・創作された讃美歌集の最も初期のものの一冊」を編纂して、禁教が解かれた明治6年(1873)頃に和本仕立てで印刷した。西洋歌曲を移植した文部省の『小學唱歌集』(1881)や、西洋詩(特に英詩)を邦訳することであたらしい詩形導入を試みた外山正一たちの『新體詩抄』(1882)に先立つ邦訳詩集として、歴史的に意義深い文献であった。1874年11月の再刊本は神戸女学院大学図書館に所蔵されていたのであるが、石井一雄がアメリカのCornell大学で初版本を発見した。＊〔紫陽〕での複製に際して、ほるぷ出版は現地へ赴いて原本を撮影した由である。今回の複製で奥付が新たに用意された。＊参考：石井一雄「コーネル大学所蔵『讃美のうた』に就いて」『研究紀要』国立音楽大学 第15集(1980)1981年2月20日 pp.13-30.

寺田 寅彦(1878-1935)：

筆名吉村冬彦，号牛頓，^{にゅうとん} 藪柑子^{やぶこうじ}。

□ 『冬彦集』(岩波書店，大正12年1月25日：1923) 〔大正〕 〈函〉

＊解説者：谷澤永一。＊大正9～11年に発表された小品や感想録のほとんどを集めた第一随筆集。同じ漱石門下の小宮豊隆が、「読者は^{にゅうとん}科學者と^{やぶこうじ}藝術家とを同時に意識するに拘らず、何の矛盾を感じないのみか、反つて其所に新らしく且つ複雑な美しさが加はつて來てゐることを確認する」であろうと、本書の卷末で評している。＊挿画：本人。初刷で3,000部が印刷されながら、岩波には第二刷しか保存されておらず、遺族から底本の提供を受けて複製された。

^{どい} 土井 晩翠(1871-1952)：

本名^{つちい}土井林吉。

□ 『天地有情^{うじよう}』(博文館，明治32年4月7日：1899) 〔明前〕/〔連翹〕 〈ジ〉

＊解説者：笹淵友一／猪野謙二。＊猪野の解説によると、泰西詩人に想を求めた「暮鐘」のような冥想詩，「星落秋風五丈原」のような史詩，「星と花」のような藤村の抒情詩の3系統に分類できる長短40篇を収録した第一詩集であり，附録にThomas Carlyle, P. B. Shelley, R. W. Emerson 論なども収録している。「晩翠の観念的詩風が明治三〇年代初期の浪漫詩壇にそれ相当の歴史的意義を

もっていた」（笹淵）せいか、当時だけでも100版近く重版されたい。＊ちなみに、岩波文庫の『晩翠詩抄』（1930年6月10日）は「荒城の月」を「天地有情より」と題した章に並べているが、初版本には収録が見られない。

土岐 善磨（1885－1980）：

号湖友、哀果。

□ 『NAKIWARAI』（ローマ字ひろめ會，明治43年4月：1910）

〔特選〕／〔石楠〕〈挿〉

＊解説者：木俣修／分銅惇作。＊95歳の生涯に130冊を著した多才な歌人としての第一歌集。土岐は、1897年に与謝野鐵幹が試みていた短歌を三行書きにする表記法を用いて、叙情的な146首を本書にまとめた。作風は、分銅によると、「恋愛感情と日常生活における身辺瑣事を内容としたものが多く、表現は平淡で清新」であった。但し、ヘボン式ローマ字で書かれていて読み難かったが、斎藤茂吉は「骨折つて読むといふことになり、即ち原作を尊敬して読むといふことになる」と、かえって記述上の利点と考えた。いっぽう啄木は、三行書きの醸す効果に着目して、直ちに『一握の砂』（1910）や『悲しき玩具』（1912）において試みている。＊意に染まなかった部分も残している本書を複製できたのは、偏に土岐の理解と厚意の賜物であったことを木俣は特記している。最終頁の対向に正誤表が挿み込まれている。

徳田 秋聲（1871－1943）：

本名末雄。

□ 『あらくれ』（新潮社，大正4年9月15日：1915）〔新選〕〈函〉

＊解説者：吉田精一。＊義妹をモデルに、勝気で野性的な女主人公の逞しい生き方を通して庶民生活の実態を自然主義的手法で描き出して、日露戦争前後に「自覚せざる「新しい女」の価値を発見し、それを立体的に造型した作者の功績は大きい」と、その「いくぶんの明るさ」をも含めて、吉田は評価する。

□ 『黴』（新潮社，明治45年1月7日：1912）〔明後〕〔精選〕

＊解説者：伊藤整。＊紅葉門下でありながら硯友社風には馴染めなかった秋聲は、紅葉の没後に興った自然主義風のほうが性に合ったようで、持ち前の観察眼と本質を掴む才能を発揮させて本作を書き上げた。それは、妻となる小澤は

まを交えた作者 31 ～ 36 歳の自伝小説であり、「死期に近い頃の、紅葉とその周辺」を描き込んだ文壇消息として、「私小説の典型を形造った」（内容見本）。

＊なお、新聞連載時の第 68 回が故意にか偶然かによって従来の単行本から脱落したままであったとして、その切り抜きが伊藤により『作品解題』に転載されている。＊青表紙の装幀と赤表紙本とがあって、後者が複製の底本にされた。

- 『縮圖』（小山書店、昭和 21 年 7 月 10 日：1946）昭和 〈ジ〉

＊解説者：稲垣達郎。＊「老作家と年増芸者の交情を淡々と描き」、自然主義文学の究極の到達点に迫りながらも、情報局の圧力により第 80 回で『都新聞』での連載を中断してしまった。1943 年 11 月に秋聲が死去すると、香典返しとして 2,000 部を印刷することが認められたが、1944 年 11 月に見本 5 部が遺族に届けられた直後に工場が空襲に遭って焼失。戦後の 1946 年 7 月に、小山書店が残存の見本と紙型から第二次初版本を刊行した。挿画：内田巖。＊その後 1944 年版の見本も所在不明になってしまい、複製に際しては袋入りの第二次初版本（1946）が底本にされた。＊要注意：ほるぷ出版の『日本の文学。（1985）』は複製本ではない。

- 『めぐりあひ』（實業之日本社、大正 2 年 8 月 30 日：1913）児②

＊解説者：瀬沼茂樹。＊^{あいし}愛子叢書、の第三編。瀬沼によると、作者が自身に照らしながら、主人公友吉の庶民的な「家庭生活の暗い現実を、暗示的に簡潔に描写しつつし」、しかも「特別に脚色の変化をこらす」でもなく淡々と語った少年小説。＊竹久夢二の大正らしい装幀と挿画も作品に相応しいとされる。

徳富 蘆花（1868－1927）：

本名健次郎。

- 『自然と人生』（民友社、明治 33 年 8 月 18 日：1900）明前精選

＊解説者：佐藤勝。＊「自然こそ神と人との仲介者であり、人を汚れなき本来の相に戻すものである」という蘆花の自然観が反映された文藝小品集で、「近代日本文学の中でも、これほど広範な読者を得、かつ生活意識・自然感情に微妙な影響を与えた書も少なからう」（内容見本）と評されている。＊原本が袋入りで販売された可能性もあるらしいが、未確認なのか複製されていない。

□ 『不如歸』（民友社、明治33年1月15日：1900）明前／秀選

*解説者：木村毅／浅井清。*兄の蘇峰が紙面刷新に勤しんでいた『國民新聞』に明治31～32年に発表された家庭小説。結核になったせいで嫁ぎ先から離縁された大山巖元帥の長女をモデルにして、上流階級における「封建時代の家系をおもんずる house から近代的な愛を中心とする house への移行の過渡期の社会を反映する悲劇」（木村）を描いて女性読者の同情と憧憬を掻き立てた。また浅井によると、新聞連載時には不評であったが、単行本化に際して7ヶ月を掛けて「冗長な描写を削除し、プロットを整合」させたのが奏効してか、蘆花にヒントを与えた『金色夜叉』と並んで明治中期の二大衆小説と称され、新派の代表的演目にもされた。*ところが原稿は買い取られていたので、印税が蘆花に支払われなかった。もっとも民友社のある社員は、「第百版を刷つたらウンとお礼をする約束となつている。それで今度は九十九版目であるから、第百版になる前に、一遍に二万部を刷つた」と、高濱虚子に洩らしたそうである。⁶ 結局、民友社版は1910年に第100版、1919年時点で第157版を刷っていた。*口絵は黒田清輝。*英・独・仏語に翻訳され、漢訳もあったらしい。*2002年1月7日に『岩波文芸初版本復刻シリーズ』で650部が複製（7,600円）されたが、それは岩波書店が1936年に出版した自社初版本を底本にしていた。

徳永 ^{すなお}直（1899－1958）：

□ 『太陽のない街』（戦旗社、昭和4年12月4日：1929）特選

解説者：小田切進。『日本プロレタリア作家叢書』の第4編、「東京随一の貧民窟トンネル長屋」（p. 9）に住む従業員が共同印刷の大争議（昭和元年12月～翌年2月）に関わった経験に取材して執筆した長篇小説であったが、『蟹工船』（1929）と同年に出版されたので、NAPF（全日本無産者藝術聯盟）による文学運動を鼓舞することになった。『近代文学名作事典』（1967）によると、舞台化されて好評であったし、ロシア語やドイツ語に翻訳されたにもかかわらず、作者の方から1937年に絶版を宣言した由である。*装幀は柳瀬^{まさむね}正夢。

⁶ 小川菊松（1953）が伝えるエピソード（pp. 106－107）。

戸田 欽堂^{きんどう} (1850–1890) :

本名三郎^{うじます}四郎氏益。

□ 『情海波瀾』(聚星館, 明治 13 年 6 月 : 1880) 明前

*解説者: 大久保利謙. *「毛並みのいいアメリカ帰りの進歩的開化人」であった欽堂が, 明治初年の自由民権運動の気運を捉えて政治小説の嚆矢的作品を生み出した。しかし人情本の枠組みを用いるなど, 「作品そのものは素人くさく, 厳密に言えば先駆の歴史的意味にとどまる」作品と目されている。

富永 太郎 (1901–25) :

□ 『富永太郎詩集』(富永二郎, 昭和 2 年 8 月 20 日 : 1927) 紫陽 〈函・ジ〉

*解説者: 吉田^{ひろお}鯉生. * 24 歳で病没してのち, 東京府立第一中學校以来の友人が尽力して 200 部のみ出版された私家版。「太郎が遺した四十篇余り(未定稿も加えて)の作品はヴァリエティに富んでいて, 代表作については評価が分かれている」と吉田は解説する。しかし大岡昇平は, 「戦後小林[秀雄], 中原[中也]の伝記的研究が進むとともに, 二人の詩精神の先駆的生活者として注目され, 象徴派からモダニズムのほうへ進展する独自の詩風が認められるにいたった」と, 文学史的観点から富永の貢献に注目している。⁷ *題字は父親の富永謙治による揮毫で, 表紙・口絵・挿絵は故人によるもの。

外山 正一^{まさかず} (1848–1900)・矢田部 良吉 (1851–99)・井上 哲次郎 (1855–1944) :

それぞれ号、山, 号尚今, 号巽軒。

□ 『新體詩抄』初編(丸屋善七, 明治 15 年 8 月 : 1882) 特選/石楠 〈和・ジ〉

*解説者: 吉田精一 / 稲垣達郎. *在来の詩型に飽き足らなさを感じていた、山が訳詩 7 篇 + 創作詩 2 篇, 尚今が訳詩 6 篇 + 創作詩 3 篇, 巽軒が訳詩 1 篇を持ち寄って, 「西洋の精神, 形式にならって新しい詩体を創造」することで国詩にしようと企図したという文学史的意義はあるものの, 3 名揃って文学の専門家ではなかったから, 「たしかに, 詩情の乏しい非詩が多い。しかし, この詩集の出現は, 新しい詩への欲求をさかんにし, 雁行する新体詩書が少なくなかつ

⁷ 大岡昇平「富永太郎」『日本近代文学大事典』第 2 卷 (1977), 同『机上版』(1984)。

た。」（稲垣）。＊原詩の殆どが、W. Shakespeare, Alfred Tennyson, Thomas Gray, Charles Kingsley, 3人が取り上げた H. W. Longfellow など、英語圏の詩人による作品であった。＊帯様の袋に入れられており、題扉には「明治十五年七月刊行」とある。＊1961年4月20日に世界文庫が、矢野峰人^{ほうじん}執筆の別冊解題（24頁＋豆辞典）を添えて350部を複製し頒布（2,000円）していた。

とよしま

豊島 興志雄（1890－1955）：

□ 『エミリアンの旅』（春陽堂，昭和8年1月25日：1933）**児①**

＊解説者：紅野敏郎。＊少年文庫、第81番。主流でも異端でも傍流でもない孤高の教養人である豊島にとっての第二童話集で、「決して道徳的要素を強調したりはしない。既製の道徳にいささかもとらわれぬ、自由さ、賢さ、爽かさ、それに一抹の詩情、それらが彼の作品の基底にひそんでいる。」（紅野）。巻頭と巻末の2篇が少年童話小説、として重要視され、「表題作品は特にスリルと夢にあふれたもので一流文学者としての面目をなしている」（内容見本）由である。＊装幀は棟方志功で、西洋人を描いた「志功之エ」が愉しませてくれる。＊八雲書店版『豊島与志雄童話全集』の第4巻（1948）に再録されたせいか、未来社の『豊島与志雄著作集』全6巻（1965～67）には収録されなかった。

□ 『夢の卵』（赤い鳥社，昭和2年3月7日：1927）**赤い鳥**

＊解説者：木俣修。＊童話は、「私たちが目に見たり耳に聞いたりする物事の、その一つ向ふの奥深いそして晴々としたそして不思議な、何とも云へない或る世界」（序）を語るはずであるから、ほとんどが翻案であっても、収録の14篇を読者がどう読もうとも、それは同じ一つの少年世界。を覗き込むことに他ならない、と木俣は説いている。＊挿絵を鈴木淳が描いていた。＊八雲書店版『豊島与志雄童話全集』の第4巻（1948）で読めるが、未来社版『豊島与志雄著作集』（1965～67）には収録されていない。

永井 荷風（1879－1959）： 本名壯吉。号斷腸亭主人，鯉川兼待，金阜山人など。

□ 『腕くらべ』（私家版，大正6年12月：1917）**大正****精選****／珠⑫**

＊解説者：成瀬正勝／磯田光一。＊作者中期の名品で、「荷風文学特有の文明批

評があり、また季節の推移に詩情をただよわせる巧みな描写」を伴った、荷風の「新橋放蕩時代の記念碑」的作品と成瀬は解説する。また磯田は、待合茶屋尾花と寶家の張り合い、実業家肌の吉岡に煽られる藝者駒代と菊千代、役者瀬川の気を引き合う駒代と君龍に、それぞれ「腕くらべ」の構図を指摘する。＊「はたる草」(pp. 26-40), 「枕のとが」(pp. 97-111), 「菊尾花」(pp. 134-156) が取り締まられると危ぶんだ荷風が50部だけ原稿通りに印刷させ秘蔵した私家版(十里香館本)には奥付が無い。そのうちの自筆訂正本が書き込みを抹消して今回複製されたらしい。＊「発禁となる虞の個所、約一万数千語ほどを削除」した公刊本は1918年2月13日に新橋堂で、再版は同年10月10日に京橋堂で、第三版が1920年2月15日に春陽堂で、それぞれ発売された。＊1954年11月30日に荷風全集刊行會が私家版を活字新組みで500部のみ復元(2,000円)していた。＊1956年9月20日に東都書房が『永井荷風選集』の第4巻(480円)として新橋堂版をかなり忠実に再現して相磯凌霜による10頁の「餘話」を巻末に綴じ込んでいる。1959年6月15日にも中央公論社が私家版を活字新組みの新書判で再刊(150円)した。そして兩再刊には、1959年まで存命であった「荷風の手が多少とも加えられている」らしい。＊私家版の古書相場については、250万円(1989)～350万円(1991)～200万円(2002)～150万円(2005)という値付けが見られた。＊参考：山田朝一『荷風の珍本』日本古書通信社 1970年11月20日 pp. 44-50。

- 『珊瑚集』(栩山書店, 大正2年4月20日: 1913) 特選 / 石楠 珠⑫ 〈函〉
＊解説者：河盛好藏 / 野口富士男。＊「アングロ・サクソン系詩人の作は彼の肌にならなかった」(野口)らしく、3ヶ月のバリ滞在中には象徴派を中心とするフランス近代詩を邦訳していた。『珊瑚集』としては、1938年2月20日に41篇を収録した第一書房版が定本とされているが、今回複製されたのは13詩人からの訳詩38篇と9篇の評論(うち3篇は翻訳)を集めた初版の方で、当時1,200部が印刷された。1910年に就任した慶應大學文學科教授の「研究業績」としてかもしれない。＊『日本近代文学図録』(1964)は、「『海潮音』について、当時の白秋、露風などに与えた影響は大きい」(p. 258)と解説。＊赤表紙・横目マーブル見返しの装幀ではなく、黄表紙・縦目マーブル本が複製された。

- 『すみだ川』（靑山書店，大正4年9月25日：1915）新選/珠⑫/SONY
- ＊解説者：成瀬正勝／前田愛／川本三郎．＊自序からは，今日の荒廃が思い出
 中の隅田川の情景や伝説を刺激し，荷風の抒情的詩心を掻き立てて筆を執ら
 せたように読める．そうした作品を7篇集めて，既に『すみだ川』（1911）と
 して靑山書店から胡蝶本（脚注13参照）の装幀で出版されていた．しかし「一
 篇本」としては，奥付に改版とある本書が初版に相当する．「江戸という都市
 をとおい過去の時代に結びつける記憶の源泉」（前田）でもあった隅田川の「風
 物を背景にし，季節の推移のうちに青年と少女の恋物語を盛った抒情的名作」
 （内容見本）であり，本文は春陽堂版『荷風全集』（1920）に由来する現行のそ
 れよりも初出に近いそうである．＊本書は胡蝶本ではないが，やはり橋口五葉
 の装幀で都鳥がデザインされている．＊要注意：はるぶ出版の『日本の文学，
 （1985）は複製本ではない．
- 『ふらんす物語』（博文館，明治42年3月25日：1909）明後
- ＊解説者：成瀬正勝．＊明治40年にはバリ入りしたほどフランス文学に魅入
 られた荷風の短篇を集める．しかし，在外邦人の淪落振りを想起させる「小説
 放蕩」（pp. 1-68）と「脚本 異郷の戀」（pp. 69-142）に問題があったらしく，
 店頭に出るよりも前に禁禁にされ没収されてしまったので，製本前の10部ほ
 どが辛うじて持ち出された．＊底本に山田朝一の所蔵本しか得られなかったこ
 ともあり，明後では簡易製本で間に合わされている．＊古書価の極端に高い
 事例として話題にされてきた稀覯本で，450万円（1989）～500万円（1991）～
 350万円（2002）～500万円（2005）という値付けも見られた．＊参考：山田朝
 一『荷風の珍本』日本古書通信社 1970年11月20日 pp. 31-43.
- 『溍東奇譚』（烏有堂，昭和12年4月：1937）昭和/秀選
- ＊解説者：成瀬正勝／磯田光一．＊私娼街であった玉の井（墨田区）をししば
 ば散策した収穫から書き下ろされた．『近代文学名作事典』（1967）は，「一方
 に為永春水に学び，他方に西洋的リアリズムの影響を受けた描写の方法，季節
 感に敏感な詩情的発想，東洋の文人気質に即した随筆の表現など，荷風文学の
 独自性を遺憾なく發揮した…作者の最終的な集大成」として最高傑作の呼び声
 が高い長篇小説と評す．＊『朝日新聞』での連載が終了する前に，荷風が50

部ずつ二度（薄茶色見返し→鶯色見返し）印刷させた非売の私家版であったが、京屋印刷所の仕事に頗る不満であった荷風は初刷の50部しか受け取らず、あとの50部をキャンセルした。＊したがって薄茶色見返し本を底本に複製されている。＊1956年1月に八木書店が活字新組みで500部を複製（1,400円）した。同じ年の7月20日に東都書房が『永井荷風選集』の第2巻（450円）として私家版を再現し、巻末に相磯凌霜^{あいそりようそう}による10頁の「餘話」を綴じ込んでいる。＊岩波文芸初版本復刻シリーズ、が2001年7月6日に650部限定で複製（7,200円）したのは、1937年8月10日に木村莊八の挿画付きで公刊された岩波版であった。＊私家版の古書相場は、100万円（1989）～150万円（1991）～150万円（2002）～200万円（2005）という値付けであった。＊参考：山田朝一『荷風の珍本』日本古書通信社1970年11月20日 pp. 50-59。＊参考：1971年1月には中央公論社が270部限定で『溷東奇譚 自筆原稿複製』を発売（27,000円）した。＊要注意：ほるぷ出版の『日本の文学』（1985）は複製本ではない。

中 勘助（1885-1965）：

□ 『銀の匙』（岩波書店、大正10年12月10日：1921）大正

＊解説者：福田清人。＊本書が「幼少時からの魂の成長とその周辺を、その主人公の場に自らを共に歩ませ詩情のある筆で細叙」していると福田は解説する。また山茶の『解説』（p. 147）によると、和辻哲郎が本書について、「不思議なほど鮮やかに子供の世界が描かれてゐる。しかもそれは大人の見た子供の世界でもなければ、また大人の体験の内に回想せられた子供時代の記憶といふ如きものでもない。それはまさしく子供の体験した子供の世界である。」と評した由である。＊表紙には初出時の著者名那珂で印字されている。また、著者自身が「いはゞ未完成品」と告げているように、巻頭に綴じ込まれた正誤表は13頁にも及んでいる。原本も岩波書店が所蔵する一冊だけしか現存しないらしい。＊2015年5月8日に岩波文芸初版本復刻シリーズ、でも650部を複製（4,200円）したが、それは改訂新版（1926）を底本にしていた。

□ ^{ろうかん}『琅玕』（岩波書店、昭和10年3月10日：1935）山茶 〈函〉

＊解説者：本多浩。＊本書は、彼の『沼のほとり』（1925）や『しづかな流』

(1932) といった日記体の随筆に添えられていた自由詩を 65 篇、短歌 28 首を集めて推敲を加えた、第一詩集ということになる。*ちなみに中勘助は、寺田寅彦、鈴木三重吉とともに漱石門下の三羽鳥と目されていた。

長田 秀雄 (1885-1949) :

□ 『鳥追船』(赤い鳥社, 大正 11 年 8 月 27 日:1922) 赤い鳥

*解説者: 木俣修。*童話劇「啞の國」と、創作風・再話風童話 7 篇の集。執筆に際して彼は、父兄・教師の口で子供に心をこめて読み聞かせて欲しいと望み、「序」に「物語の筋よりも私は詩の心持に重きを置いた」と付言している。

長塚 節 (1879-1915) :

□ 『土』(春陽堂, 明治 45 年 5 月 15 日:1912) 明後新選/SONY 〈函〉

*解説者: 小田切進/立松和平。*故郷鬼怒川沿いの貧農の一家をモデルに、彼等の悲惨な生活を通して「人間的な愛による救い」を描く。手法的には自然主義文学風ながら描くところは漱石的で白樺派に近いともされ、長塚唯一の長篇小説は農民文学の傑作との評価で一致している。*装幀は平福百穂^{ひやくすい}で、漱石執筆の 16 頁の序文を掲載する。赤色系の函と白色地に鳳仙花の表紙がしっくりくる。*要注意: ほるぷ出版の『日本の文学』(1985)は複製本ではない。

中西 梅花 (1866-98) :

本名幹男。^{ひょうじょ}号漂絮, 落花村舍主人。

□ 『新體梅花詩集』(博文館, 明治 24 年 3 月 10 日:1891) 山茶 〈ジ・挿〉

*解説者: 前田愛。*個人による新体詩集では最初期の一冊で、刹那的快樂主義の傾きを持ち味にした長短 22 篇を収めて、明治「二十年代初頭の詩集としては例外的に、ヴァリエエティに富んだ詩集」と称揚されている。『日本近代文学図録』(1964)は、「奔放な自由詩の形に仏教的無常観と老荘の虚無思想を盛った著者の唯一の詩集」であり、その頃に発病した「狂詩人の個性が顕著に示されている」(p. 231)と解説する。*森鷗外、森田思軒、徳富蘇峰が序文を、幸田露伴が跋を寄せていた。梅の花をあしらった風趣ある装幀で、山茶でも原本通り袋に入れられて正誤表も奥付の前に貼り込まれている。

中野 重治 (1902-79) :

□ 『中野重治詩集』(ナツ出版部, 昭和6年10月5日:1931) 昭和連翹

*解説者:小田切進。*重治の「初期作品は、**朔太郎**、**犀星**のほか、**春夫**、**白秋**、**光太郎**らの影響を受けながら、「自然発生的」に歌いだされ」てきたが、プロレタリア詩に向かうようになると「きびしい、新鮮なリズムと美しさ」を醸して注目されるようになった。*本書は彼が生涯に発表した詩70篇のうち53篇を収めて内容的には昭和初期の詩的水準を極めた詩集と見做されるようであるが、製本所に踏み込んだ特別高等警察により押収されてしまったので、居合わせた伊藤信吉が咄嗟に座布団の下に押し込んだ未製本の一冊が残存するのみであった。それで、近代文学館は中野に語りながら複製版の装幀をデザインした由である。*戦旗社を継承したNAPFの社名は^全日本無産者藝術聯盟、を意味するEsperanto語Nippona Artista Proleta Federatioの頭字語であった。
*要注意:はるぷ出版の^日本の文学。(1985)は複製本ではない。

中野 逍遙 (1867-94) : 本名重太郎。号字威卿。芳園、梅園、孤樸園、狂骨など

□ 『逍遙遺稿』正編・外編(不破信一郎, 明治28年11月16日:1895)

紫陽 〈和・挿〉

*解説者:前田愛。*中野は、**漱石**や**子規**と同じ明治17年(1884)に大學豫備門に入学し、帝國大學では漢學科に進んだ最初の文学士であったが、若くして病没した。一周忌に有志たちの働き掛けで、「重野安繹が撰した詩文をあつめた正編と、残余の鶏肋と佐々木信綱撰の詠草とを併せ録した外編の二部構成」の漢詩集が、非売500部限定で出版された。別刷りで挿み込まれた発起人と出版寄付者リスト各一通には、明治~大正に大成した文人の名が並んでおり、前田は「漢詩という文学形式が、西洋の文明と出会ったときに咲かせた、最後の大輪の花」と評す。奥付も別刷りになっている。*文学館の『詩歌文学館』シリーズで複製された唯一の漢詩集であった。*参考:原文に笹川臨風等による訓読を添えて岩波文庫が1929年9月10日に公刊した。岩波文庫目録は、「日本人が和歌ではなく漢詩で恋愛を縦横に謳った稀有なもの」と解説している。

中原 中也（1907－37）：

□ 『在りし日の歌』（創元社，昭和13年4月15日：1938）

昭和精選紫陽 〈函〉

*解説者：大岡昇平。*自ら編集した原稿を小林秀雄に託したのは昭和12年9月下旬であったが，その翌月に中也は急死したので，校正を経ずに刊行された。『山羊の歌』（1934）の拾遺を意図して執筆されたい第二詩集で，「本誌集には生からの乖離，別離の調子がある」（内容見本）。*装幀は青山二郎。⁸初版は600部刷られ，翌々月に300部が刷り増された。*要注意：ほるぷ出版の『日本の文学』（1985）は複製本ではない。

□ 『山羊の歌』（文圃堂書店，昭和9年12月10日：1934）山茶 〈函・挿〉

*解説者：大岡昇平。*自らを「顎が細く，耳が立っているから山羊だ」とイメージしていた中也が，旧制中學校の四年生時に同棲した女優の長谷川泰子との離合を縦糸に張った抒情的な詩の集で，過去10年に執筆してきた作品から70余篇を収めた第一詩集。*自費出版のつもりで1932年には編集を済ませ，本文のみは美風社で印刷を終えていた。その2年後に高村光太郎が装幀を引き受けて，本郷の文圃堂が200部限定本として製本と発売を受託した。*1970年9月10日に，麦書房が総草装40部と，360部限定版（6,500円）とを，中村稔による別冊解説（12頁）を添えて複製した。*日本図書センターが1999年に『愛蔵版詩集シリーズ』で「初刊のデザインの香り」を新字体で再現しようとした。*要注意：ほるぷ出版の『日本の文学』（1985）は複製本ではない。

長與 善郎^{よしろう}（1888－1961）：

□ 『項羽と劉邦』（新潮社，大正11年6月5日：1922）大正 〈函〉

*解説者：岩淵兵七郎。*力の権化である項羽を徳の権化の劉邦が打ち負かすことを執筆の主眼にした5幕17場（第三改正版からは16場）の長大な戯曲で，最盛期の『白樺』に1916年9月から翌5月まで連載された。単行本化された初版（第一改正版，1917）は稀観本というほどでもないらしく，大正では豪華

⁸ 青山の「装幀と出版」が『装丁』（1998）に収録。彼は文圃堂店主の友人であった。

本（第二改正版）が複製された。しかし長與としては、上演時間を考慮した第四改正版（中川一政装幀の四六判で、1942年10月18日に坂上書院より刊行された）を決定版と思い定めていたらしい。＊装幀・挿画：^{こうのつうせい}河野通勢。

夏目 漱石（1867－1916）⁹： 本名夏目金之助→鹽原→夏目。俳号愚陀佛。

□ 『鶉籠』^{うずらかご}（春陽堂、明治40年1月1日：1907）

〔特選〕／〔漱石〕／〔RD〕／〔漱小〕／〔漱選〕／〔CatH〕 〈ジ〉

＊解説者：小田切進／福田清人／荒正人／福田／無名氏／平岡敏夫。＊津田青楓（1947）が背景をほのめかしているが（pp. 192－93）、漱石は英語を教えていた東京高等師範學校を辞して1895年に松山中學校へ都落ちした。翌年熊本高等學校へ転出したが、その頃の「胸中に漂へる或物に一種の體を與へ」（序）るべく雑誌に発表してきた、それぞれ趣きの異なる「坊っちゃん」（『ホトトギス』1906年4月）、「草枕」（『新小説』9月）、「二百十日」（『中央公論』10月）を、鶉を籠に集めるように単行本化する。＊装幀は、漱石本を多く手掛けるようになる橋口五葉。＊なお、「坊ちゃん」（中扉）～「坊っちゃん」（内題・尾題）～「坊っちゃん」（柱）と作品名の表示からして不揃いであったが、3作品の本文も原稿～雑誌初出～初版の間に揺れが多いようで、荒正人が集英社版『漱石文学全集』第2巻（1970年8月30日）で対照表（pp. 761－72 & 774－78 & 784－88）を挙げている。＊参考：未公開であった『坊っちゃん』の原稿を番町書房が1970年4月15日に2,000部を複製して、江藤淳～紅野敏郎等の執筆によるA3判44頁の別冊解説とセットにして30,000円で販売したが、2007年10月22日に集英社が『直筆で読む「坊っちゃん」』で全頁の原稿を縮小して1,200円＋税で提供している。

□ 「永日小品 山鳥」（自筆原稿）〔明後〕^付〔新選〕

＊解説者：吉田精一。＊明治42年（1909）に『朝日新聞』が連載した「永日小品」から、唯一原稿が残されている「山鳥」の15枚を、編集者による書き

⁹ 小森陽一（他編）『漱石辞典』（翰林書房、2017）を適宜参照した。各作品の印刷部数について、娘婿の松岡譲が『漱石の印税帖』（1955；文春文庫、2017）で明治・大正期における実数を示している。

込みを抹消して複製する。『四篇』所収の「永日小品」25篇のうちとして活字化されている（初版，pp. 104-109）。*原稿の複製は『新選』の第5刷（1972年4月10日）～第26刷（第二版4刷，1984年10月20日）でも付録にされた。

- 『英文學形式論』（岩波書店，大正13年9月15日：1924）〔漱石〕 〈函〉

*解説者：篠田一士。*編者皆川正禧の「はしがき」によると，漱石が『文學論』を講述するに先立って「普通の習養ある日本人」が英文学の「内容形式の何れの程度まで理解し得るかを吟味」しようと，東京帝國大學で1903年に講じた「英文學の概念（Genral Conception of Literature）」の筆記録から，野上豊一郎（野上彌生子の夫）の依頼で皆川が起こし，没後8年にして公刊された。しかし漱石自筆の草稿は残されていなかったため，皆川は受講仲間のノートを照合して復原，「自分は勝手に此抄録を英文學形式論と名付けた」由である。

- 『硝子戸の中』^{うち}（岩波書店，大正4年3月28日：1915）〔漱石〕 〈函〉

解説者：木俣修。『「こゝろ」では先生を死なせているが，『道草』では健三を死なせていない』といった作風の変化は，漱石の四度目の胃潰瘍の発作に起因するらしいが，両作品の間に位置する『硝子戸の中』では，病臥する狭い空間から外界を眺め「生死の問題を真剣にみつめ」た随想を，朝日新聞社社員として1915年に39回執筆していた。*小型の袖珍本で，著者自装であった。

- 『切抜帖より』（春陽堂，明治44年8月18日：1911）〔漱石〕 〈函〉

*解説者：相馬庸郎。^{つねお}*公私にわたり多事であった1910～11年に，『朝日新聞』の「文藝欄」に発表してきた随想13篇を集める。当時の漱石の生き方や考え方を知る上で重要な作品と目されている。*装幀は橋口五葉による。

- 『草合』^{くさあわせ}（春陽堂，明治41年9月15日：1908）

〔漱石〕/〔RD〕/〔漱小〕/〔漱選〕 〈函〉

*解説者：猪野謙二／荒正人／猪野／無名氏。*中篇の「野分」は明治40年に『ホトトギス』に発表された。荒によると，「道義を求めて生きる人間と，利益を求めて生きる人間という基本的対立の中に，信義，同情，友情の価値も強く認め」ようとするが，文学者白井道也の夫人に漱石の妻鏡子の素顔も投影されているそうである。*「抗夫」は翌年1～4月に『朝日新聞』に連載された。足尾銅山の坑夫に取材して，極限状態に働く「主人公の心理やその意識下の世

界」に追った中篇。＊装幀は橋口五葉で、初版 2,000 部。複刻にあっても表紙が黒漆で鏡面のよう仕上げられている。漱石の五葉宛書簡（明治 41 年 9 月 16 日付）参照。但し、RDや漱選での表紙は漆仕上げでなく黒色印刷である。

- 『虞美人艸』^{そう}（春陽堂，明治 41 年 1 月 1 日：1908）

漱石/RD/漱小/漱選 〈函〉

＊解説者：澁川^{ぎょう}驍／荒正人／澁川／無名氏。＊朝日新聞入社後初の連載と気負ったせいか、「ことばの過剰を生んで、寄り道の多い誇張的作品」となってしまう、多くを偶然に頼った戯曲の構成や観念的な傾きも難じられてきた。いっぽう、主人公の藤尾は美貌に恵まれ教養も豊かで且つ気位の高いところが新しい女性らしく現代ではむしろ好感されるが、漱石の女性観には馴染まなかったようで、「嫌な女」と評していた。かつてドイツ語訳の承諾を求められた漱石は「自分の代表的著作ではない」と謝絶したらしいが、荒の読みでは、「登場する人物の動きは意外に生き生きしている。これは、道義と我執の対立という根本的前提を正確に踏まえて、登場人物を性格ではなくて力学として動かしている」せいであるらしい。＊装幀は橋口五葉で、初版は 3,000 部と推定されている。

- 『行人』（大倉書店，大正 3 年 1 月 7 日：1914）漱石/RD/漱小 〈函〉

＊解説者：磯田光一／荒正人／磯田。＊『三四郎』～『それから』～『門』で展開されてきた「^ゝ個人。と^ゝ社会秩序。のディレンマの問題」が、『行人』になってからは「他人との間に心の橋がかからなかった場合に生起する人間の孤独」あるいは「共同体に同化できない^ゝ個人。のディレンマ」として、一家の長男 vs 見合いによる嫁 vs 次男たち を介して描き込まれていく。本作は大正元年～2 年に『朝日新聞』に連載され、「友達」→「兄」→「歸つてから」→「塵勞」に至って中断されたが、荒は「漱石の最大傑作の一つ」に数えている。＊橋口五葉の装幀で、褐色の背皮には動植物の模様が赤と緑に染め込まれている。

- 『こゝろ』（岩波書店，大正 3 年 9 月 20 日：1914）

大正新選/漱石/RD/漱小 〈函〉

＊解説者：小田切進／江藤淳／荒正人／江藤。＊大正 3 年に『朝日新聞』に 110 回連載されたが、短篇的作品が「先生と私」→「両親と私」→「先生と遺書」と繋がって、「読者はいつか不思議にもの悲しい、しかし水晶のように澄み切っ

た雰囲気のなかに連れ去られる」（江藤）という構成を有している。また小田切の解釈では、「自我の醜さに苦しみ、たえず罪の意識に責められる魂」を「透明な文体で深く美しく描きだし」た長篇小説に昇化されている。＊岩波書店の出版物第一号で、自費出版のつもりで装幀を引き受けた漱石が表紙に採用した石鼓文の拓本は、その後の岩波版漱石本に踏襲されている。函や表紙では「心」と表記されている。江藤によると、London 滞在中の漱石は art nouveau に触れて装幀に親しんだらしい。＊2001年8月6日に「岩波文芸初版本復刻シリーズ」から650部が限定販売（8,000円）され即日完売となった。＊岩波は1984年にも1917年の岩波版袖珍本を底本に復刻していた。＊参考：1993年12月に岩波は『心：漱石自筆原稿』全5冊を石原千明の解説を付けて480部販売（213,592円＋税）しており、現在も（僅少な）在庫しているようである。＊参考：和泉書院版「近代文学初出復刻」の玉井敬之（他編）『夏目漱石集「心」』（1991年12月30日）は『東京朝日新聞』から全掲載頁を複写して2,500円＋税であった。＊要注意：ほるぷ出版の「日本の文学」（1985）は複製本ではない。

□ 『三四郎』（春陽堂、明治42年5月13日：1909）

精選／漱石／RD／漱小／漱選 〈函〉

＊解説者：猪野謙二／三好行雄／荒正人／三好／無名氏。＊明治41年9～12月に『朝日新聞』に連載された。九州から上京した学生「[小川] 三四郎の青春の揺動を経とし、漱石の文明批評を緯として織られてゆく」構造で、「近代知識人にとって愛は可能か、という問いを秘めて…愛の倫理的基盤をたずねる初期三部作の発端」となった長篇小説であると三好は解説する。また『日本近代文学図録』（1964）は、「青春の詩情と社会批判が相まってリアリズムへ展開してゆく転機」（p. 258）に立つ作品と見ている。＊橋口五葉による装幀は重厚さにおいて圧倒的で、865gも重量がある。漱石の五葉宛書簡（明治42年5月25日付）参照。＊要注意：ほるぷ出版の「日本の文学」（1985）は複製本ではない。

□ 『三四郎・それから・門』（春陽堂、大正3年4月15日：1914）秀選 〈函〉

＊解説者：小田切進。＊漱石の作品は生前から袖珍本（縮刷判）として再刊されつつあったので¹⁰、「明治の知識人が人間関係の新しいありかたを、そして愛

¹⁰ 没後に袖珍化された『道草』（1917）、『心』（1917）、『明暗』（1918）を岩波書店が

の可能性をさぐって思想的にも道徳的にも、どのように迷い、苦しみ、孤立しながら、模索したか」を描き込むことで繋がっている三部小説が利便性と経済性のために千頁弱の合冊・縮刷本にされ、翌年には三分割された袖珍本としても再刊されている。＊津田青楓が、小型ながらも漱石ワールドを想起させる装幀を施している。¹¹本書は好評だったようで、5年後には第43版まで数えた。

＊初版用の函が未発見だったので、**秀選**では後刷りから函が復元されている。

□ 『四篇』（春陽堂，明治43年5月15日：1910）

漱石／**RD**／**漱小**／**漱選** 〈函〉

＊解説者：紅野敏郎／荒正人／紅野／無名氏。＊函背・内題・尾題・奥付に「漱石近什^{つのがき}」と角書されているように、前年に『朝日新聞』に断続的に執筆された小品「文鳥」，「夢十夜」，「永日小品」，「滿韓ところゝゝ」を集める。聖書の「詩篇」や「死」に語呂が重なる書名なので，「漱石の名作を解く鍵の部分」がメッセージ化されている可能性も問われるようになった。＊橋口五葉が装幀。

□ 『社會と自分』（實業之日本社，大正2年2月5日：1913）**漱石** 〈函〉

＊解説者：奥野健男。＊明治44年（1911）の講演4篇に旧稿2篇を添えた本書は，序文によれば，「主意を抽象」させた結果として『社會と自分』と命名された。「文章のかたちでも発表したことのない問題，しかも自己の重要なモチーフや考え抜いて来た思想を，文章に書くのと同じ心構えで語った」講演であったが，出版に際しては綿密に筆が加えられた由である。とりわけ明治40年の「文藝の哲學的基礎」は，自らの創作姿勢のマニフェストとなっていて重要な講演と目されている。＊装幀者については不明。

□ 『漱石詩集 印譜付』2冊（岩波茂雄，大正8年6月15日：1919）

漱石 〈和・函〉

＊解説者：山本健吉。＊和装本の一冊は35丁の漢詩集で，171篇を25丁に収める。第26-35丁収録の附録「^{ぼくせつろく}木屑録」は，22歳の房総旅行に取材した漢文による紀行文で，この作品で「漱石」の号が初めて用いられた。もう一冊の和

1984年1月10日に複製（3冊一括6,800円）しているので，蒐集して賞読したい。

¹¹ 津田は『装丁』（1998）の「装幀の話」で，「〔鈴木〕三重吉君は中々神経質で，私の装幀の図案をいろいろ文句をつけ…漱石先生はその点で非常に気が楽だった」と回顧した。

装本は全 28 丁からなる印譜集。この 2 冊本セットは漱石の没後に編まれた。

□ 『漱石俳句集』（岩波書店、大正 6 年 11 月 10 日：1917）漱石

*解説者：飯田龍太。*漱石が明治 22 年（1889）～大正 5 年に詠んだ俳句・俳体詩・連句を「出来得る限り遺漏なきを期して集収」し、小宮豊隆が転写し野上豊一郎が分類したと巻末に記されている。飯田は、収められた二千数百篇には「佳品が決してすくなくない」ものの「過半は三流乃至四流」の出来映えであったからこそ、修善寺での大患後にも、子規が俳句に取り込まれたようにはならず、小説執筆の路線を維持し得たのであらうと見る。*装幀者は不明。

□ 『それから』（春陽堂、明治 43 年 1 月 1 日：1910）

漱石 / RD / 漱小 / 漱選 〈函〉

*解説者：佐々木基一 / 荒正人 / 佐々木 / 無名氏。*前年 6～10 月に『朝日新聞』に 110 回連載された。小川三四郎を 30 歳代に老けさせたような「高等遊民・長井代助の「微温的な教養の世界が一挙に崩壊の危機にみまわれ」たのは、友人平岡の妻三千代との姦通が切っ掛けであった。「インテリゲンチヤのエゴを充足させることがいかにして可能か」を問い始めた漱石は、『門』から『明暗』へと「身を削るほどにして、この問題の解決の道を手探りしてやまなかった」（佐々木）。荒の読みでも、「最後になって…主題の掘り下げも急に深くなった感じである。…新聞小説というわくのなかでこれだけの仕事をしたことは夏目漱石の光栄である。」と好意的。*橋口五葉の装幀で、初版は推定 2,500 部。*参考：岩波書店は 2005 年 9 月に『それから：漱石自筆原稿』全 5 冊を十川信介の解説付きで 320 部販売（160,000 円＋税）し、現在も在庫のようである。

□ 『彼岸過迄』（春陽堂、大正元年 9 月 15 日：1912）

漱石 / RD / 漱小 / 漱選 〈函〉

*解説者：佐藤泰正 / 荒正人 / 佐藤 / 無名氏。*漱石は明治 45 年元旦に本作の執筆の意図を『朝日新聞』に公表した。すなわち、「かねてから自分は個々の短篇を重ねた末に、其の個々の短篇が相合して一長篇を構成するやうに仕組んだら、新聞小説として存外思白く讀まれはしないだらうかといふ意見を持してゐた。」というものであった。連載は正月 2 日に始まり、狂言回しあるいは迷探偵役に就活中の田川敬太郎を配し、下宿の同居人森本との遭遇を発端に松

本の述懐に接するまで、「風呂の後」～「停留所」～「報告」～「雨の降る日」～「須永の話」～「松本の話」～「結末」と、語りの視点と文体を変えながらのオムニバス長篇小説にまともって、彼岸過ぎ(4月29日)に完結した。佐藤は、本書をもって漱石の文学は後期に差し掛かったとする。＊装幀：橋口五葉。

□ 『文學評論』(春陽堂, 明治42年3月16日:1909) 漱石 〈ジ〉

＊解説者：佐伯彰一。＊帝國大學での講義「十八世紀英文學」の草稿から森田草平と瀧田栲陰が原稿に起こし、漱石が加筆と訂正に1ヶ月を費やして仕上げられた。漱石は、W. C. Sydney, Leslie Stephen, Walter Besant, G. M. Trevelyan, George Saintsbury, Edmund Gosse, William Minto, William Courthope, David Masson といった当時の基本的文献を参照しながら、講義方針から、十八世紀^{ロンドン}倫敦の路地裏まで案内してくれそうな社会状況の解説へ進み、随筆家 Joseph Addison (1672-1719), 劇作家 Richard Steele (1672-1729), 風刺家 Jonathan Swift (1667-1745), 詩人 Alexander Pope (1688-1744), 散文家 Daniel Defoe (1660-1731) 等々について寛いだ口調で講じてくれる。＊『それから』の巻末広告には、橋口五葉氏意匠。とあるが、前々年の『文學論』と装幀が似ており、内田魯庵宛書簡(明治42年4月3日)からも装幀に漱石の意向が働いたことは想像される。＊初版の1,000部は即完売になったが、誤植が多かった。第三版と第四版は同じ紙型から刷られて、正誤表(3頁)が奥付の前に貼付されたらしいので、複刻版にもそれをオマケして欲しかった。いっぽう、「ジャケット付のものは稀観中の稀観で本複刻にあたり夏目純一氏の好意により再現できた」(p. 177)のは得点であった。純一は漱石の長男。

□ 『文學論』(大倉書店, 明治40年5月7日:1907) 漱石

＊解説者：吉田精一。＊中川芳太郎が筆記した「英文學概説」の受講ノートに漱石が加筆して出版された。講義では、「心理的に文學は如何なる必要あつて、此世に生れ、發達し、頽廢するか」、また「社會的に文學は如何なる必要あつて、存在し、興隆し、衰滅するかを究めん」(序)と、認識論的美學に頼らぬ心理学・社会学的手法が採られた。本書は明治時代に刊行された唯一の文學論であり、「引例に伴う鑑賞批評がゆたかで、個性的な觀察、奇抜な諧謔がまじって読んで楽しい」と称賛されてきた。本書に約20年遅れてCambridge大学に新設さ

れた英文学科では I. A. Richards が始めた研究法が、「心理学と生理学を援用して文学を解明しようとするもので、もちろん、イギリスには先例がない。ヨーロッパ、アメリカにもない。世界で最初の研究法であると信じられたのは是非もないが、ずっと前に、ほとんど同じアプローチで、同じような試みをした日本人がいた」との指摘もある。¹² 画期的業績ながらも傍証資料に英文学論の色合いが濃いせいか、国文学研究者には敬遠されがちであった。＊装幀は漱石自らのデザインかもしれない。しかし当時の造本技術を超える頁数であったために、綴じの無難な原本は少ないらしい。＊また、岩波版『漱石全集』第 14 卷（1995）によると、初版には誤植が多くて、再版で中川名義の正誤表（8 頁）が持えられたらしいから（pp. 709-10）、初版本の複製であってもその表を付けて欲しかった。

- 『^{ほくせつろく}木屑録』2 冊（岩波書店、昭和 8 年 3 月 15 日：1933）漱石 〈和・函・挿〉
 ＊解説者：長谷川泉。＊明治 22 年（1889）に友人と房総半島を旅して、初めて〆漱石、の筆名で綴った 5 千字弱の漢文紀行文と漢詩の集で、『**漱石詩集 印譜付**』（1919）に収録されていた「木屑録」の稿本が、大學豫備門以来の親友**正岡子規**が入れた朱筆と評語を残したまま、漱石十七回忌の配り物として複製された。＊稿本は半紙 33 丁を二つ折りにして紙縫^{こより}で綴じた和本で、ノンブルは無い。それに小宮豊隆による解説文と熊本高等學校での漱石の教え子のひとり湯淺廉孫^{れんそん}による訳文を別冊（32 頁）にして、一帙に包み夫婦函に収められている。更に、本書作成当時の正誤表 1 枚が別冊に挿み込まれている。
- 『道草』（岩波書店、大正 4 年 10 月 10 日：1915）漱石漱小珠⑬ 〈函〉
 ＊解説者：内田道雄。＊『**彼岸過迄**』～『**行人**』～『**心**』を通して「知識人の孤立した内面の深刻な描出を試みてきた」漱石は、本作を大正 4 年夏から 102 回の連載で『朝日新聞』に執筆した。「現在の生を死に向かう**道草**」と考えた漱石が、その道草において人間関係を歪めがちな「血と肉の歴史」を剔出すべく、妻鏡子との性格的不和や養父鹽原昌之助に付き纏われた実体験に取材した自伝的小説であった。＊装幀は津田青楓。＊2002 年 2 月 6 日に〆岩波文芸初

¹² 外山滋比古が『日本の英語、英文学』（研究社、2017）p. 129 で示した見解を引用。

版復刻シリーズ、として 650 部限定で販売（8,600 円）された。＊但し岩波が 1984 年に復刻したのは 1917 年の岩波版袖珍本の方で、それも津田の装幀であった。＊要注意：ほるぷ出版の『日本の文学』（1985）は複製本ではない。

□ 「道草」（書き潰し原稿）4 枚 RD^付

＊解説者：小坂晋。＊『道草』の第十三章冒頭箇所（初版本で p. 49）の書き損じ原稿 3 枚と、第十一章を書き始めながら英語の走り書きになってしまった反古 1 枚。それに小坂執筆の解説が 1 枚添えられている。＊八木福次郎（2007）が教えるように、内田百閒が『丘の橋』（1938）所収の「漱石先生の書き潰し原稿」で、門弟から無心があれば反古が下げ渡されていた様子を伝える。

□ 『明暗』（岩波書店、大正 6 年 1 月 26 日：1917）漱石漱小／珠⑬ 〈函〉

＊解説者：荒正人／小田切秀雄。＊大正 5 年に『朝日新聞』に 188 回まで連載されたところで、12 月 9 日に漱石が病没し、12 月 14 日（東京版）あるいは 26 日（大阪版）に掲載が終了し、四十九日忌に合わせて未完のまま出版された。当時谷崎潤一郎が低級な小説と扱き下ろしたそうであるが、荒は RD の解説書で、『明暗』は「俗物中の俗物」に描かれている津田由雄を「俗物だと思えぬ人たちには、残念ながら、初めから全く分らぬ」（p. 95）はずと反撥し、漱石 の『解説』では同じ荒が、本作こそ「日本の近代文学のなかで、最初の二十世紀文学として現在も光栄に輝いている」と絶賛を惜しまない。また『近代文学名作事典』（1967）は、知性的な人物たちによって交わされる会話が理屈っぽく主題が展開されないうちの絶筆となったが、「複数人物の心中にはいつて多岐的な人間関係の描出」を試みるところは漱石にしては珍しい手法であったとして、友人吉川の夫人と、同窓の小林という『下等遊民』に注目する。＊「作品としての完結からはかなり距って」（荒）いながら、既に重量が 1 kg を超えているほどの幻の大作といった貫禄。＊2001 年 11 月 6 日に『岩波文芸初版本復刻シリーズ』として 650 部が販売（9,300 円）された。＊なお、1984 年に岩波が復刻したのは 1918 年の岩波版袖珍本の方で、やはり津田の装幀であった。＊要注意：ほるぷ出版の『日本の文学』（1985）は複製本ではない。

□ 『門』（春陽堂、明治 44 年 1 月 1 日：1911）漱石／RD／漱小／漱選 〈函〉

＊解説者：小島信夫／荒正人／小島／無名氏。＊『朝日新聞』に前年の 3～6

月に連載、『それから』での代助は、『門』では大学を中退して役所勤めになった宗助に引き継がれ、三千代はお米となって、今度の夫婦は路地裏の屋下にひっそり暮らしながら、宗助はお米の前夫であった大学時代の友人を裏切ったという過去に追い詰められていく。神経衰弱になった宗助は（漱石が圓覺寺で経験した通りに）鎌倉の寺に参禅するが、宗教の門を潜ることは許されなかった。『日本近代文学図録』（1964）によると、「写実的な現実描写に対し自然主義作家ら、なかんずく**正宗白鳥**は好評をもって迎えた」（p. 258）そうである。＊橋口五葉が装幀し、初版では2,000部が印刷されたと推定されている。

- 『漾虚集』^{ようきょ}（大倉書店&服部書店，明治39年5月17日：1906）

漱石 / RD / 漱小

＊解説者：小田切進 / 荒正人 / 小田切。＊『猫』の上編と中編の間に出版された。自らの書齋「漾虚碧堂」から書名を採った第一短篇集で、雑誌に発表してきた7篇すなわち「倫敦塔」（初出1905）、「カーライル博物館」（同）、「^{まほろし}幻影の盾」（同）、「^{かいろうこう}琴のそら音」（同）、「一夜」（同）、「^{かいろうこう}薤露行」（同）、「趣味の遺傳」（1906）を収める。＊装幀・口絵・中扉に中村不折も関わったらしいが、主に橋口五葉の仕事だったようである。＊誤植もあって、初出～初版～訂正三版（1907年3月10日）の間に本文の異同が多く、荒正人が集英社版『漱石文学全集』の第2巻（1970年8月30日）に対照表（pp. 750-61 & 778-84）を掲げている。

- 『吾輩ハ猫デアル』[上編]・中篇・下編（大倉書店&服部書店，

明治38年10月6日，39年11月4日，40年5月19日：1905～1907）

明後 新選 / 漱石 / RD / 漱小 珠① / SONY 〈ジ〉

＊解説者：荒正人 / 瀬沼茂樹 / 荒 / 瀬沼 / 竹盛天雄・大岡信・高橋源一郎。
＊初めは単発の諷刺的滑稽文として「吾輩は猫である」を『ホトトギス』に寄稿したところ，それがホトトギス派の「山會」で朗読されて好評だったので，気を良くした漱石が書き進めることになった。第二回から舞台が賑わい出して，第三回目では設定でも小説の様相が整い始め，結果的には全11回の案外な長篇戯文となった。そこで描き出されたのは，自らがLaurence Sterneによる荒唐無稽な長篇小説(?) *Tristram Shandy* (1759～67) を明治30年に評したと同じ「趣向もなく，構造もなく，尾頭の心元なき海鼠のような」（上編「序」）戯

文的世界であった。それでも、「冷淡な扱いに甘んじている未経験な仔猫…が、
「吾輩」を名乗る」ちぐはぐさが醸す俳諧的な効果を竹盛が面白がったように、
「漱石の可能性を最初に示した独創的滑稽文学」がここに誕生したことになる。

*装幀を依頼された橋口五葉(清)は、漱石の第五高等學校(現熊本大学)での
教え子橋口貢の弟で、東京美術學校(現東京芸術大学美術学部)の生徒であった。
装幀の仕事は初めてであったが、漱石に気に入られ都合16点の装幀を任され
ることになって、装幀史では日本の草分け的存在となった。¹³ 挿画には中村不折
(上編)や浅井忠(中・下編)も関わった。3冊ともジャケットが被せられて
いるが、一冊目に[◇]上編の印字は無い。*内田魯庵が明治42年に、「近來の
製本では夏目君の「猫」が一等である。夏目君の著書は一々趣味を凝らしてあ
るが、其中で「猫」が一番だ。僕は「猫」の上巻を夏目君の傑作とも信じ且又
製本の上からも珍重して座右第一の書と秘藏してゐた…」と、絶賛している。¹⁴

*1965年3月18日には『明治村版 吾輩は猫である』が、487頁の本文と挿画
を縮小させて上編の装幀に収め、野田宇太郎による巻末解説(9頁)とプラス
チック製ペーパー・ナイフを添えて、明治村(愛知県)開村記念に村内限定で
販売(500円)していた。*RDでは本文の印字や木版画の色合いが漱石の
より薄いようである。*参考:集英社版『漱石文学全集』の第1巻(1970年6
月30日)が、詳細な荒正人(他)による「註解」(pp. 629-723)と「校異」(pp.
725-71)を収録している。*要注意:ほるぷ出版の[◇]日本の文学。(1985)は
複製本ではない。

¹³ 漱石の『解説』から『装丁』(1998)に転載された原弘の「漱石本の装幀」に依った。
なお五葉の装幀には、[◇]胡蝶本、と呼ばれる独特なデザインがあって、紅野敏郎の『大
正期の文芸叢書』(雄松堂出版, 1998) pp. 93-96に全24点の詳細なリストがある。

¹⁴ 柳田泉(編)『書齋文化』京都:桑名文星堂 1942年11月10日 p. 127。内田は、「一番
人気ある作者は漱石であるが、漱石作中の一番人気のある『猫』でも古い初版は顧みる
ものはない。夜肆にでも轉がつてゐたら十五銭か二十銭そこらであらう。」(p. 274)とも。

なるしま
成島 柳北 (1837-84) :

本名これひろ惟弘、号我樂多堂。

□ 『柳橋新誌』 2冊：全（二編）・完（初編）

（けいしやう奎章閣，明治7年2月，同4月：1874）**特選** 〈和〉

*解説者：塩田良平。*徳川將軍の元侍講でありながら柳橋という「花街に入りし風流を恣にした」成島惟弘が、柳北の筆名で初編を安政4年（1857）以前に著していた。いわば「柳橋の讃歌」で、それが明治2年（1869）頃から私板（通称青表紙本）で流布していた。明治7年2月になって柳北は、柳橋の「挽歌」であり、延いては江戸への懐旧と明治へ痛罵でもある第二編を公刊することにしたが、初編が粗悪な私板にされたのを憂えていたので、序でに初編に改筆を施して4月に公刊（黄表紙本）することにした。戯文調ながら、かつての幕府の高級官僚に似つかわしい（のであろう）漢文体で著された和装本。

にいみ
新美 南吉 (1913-43) :

旧姓渡邊，本名正八。

□ 『おぢいさんのランプ』（有光社，昭和17年10月10日：1942）

児①**児選** 〈ジ〉

*解説者：鳥越信。*生前刊行の児童書としては2点目。郷里知多半島の郷土色や物語性が好感されて、没後にも作品集が度々出版されたのであるが、戦中～戦後の社会情勢が影響して本文の改変が重ねられてきたため、初版本の複製は「原作研究」を促すと期待されている。*棟方志功による装幀と挿画は殺伐とした時代の読者の心を潤わせたであろう。*「わくわく！名作童話館。（日本図書センター，2006）での復刻は文字遣いや装幀が現代化されている。

□ 『花のき村と盗人たち』（帝國教育會出版部，昭和18年9月30日：1943）

児② 〈ジ〉

解説者：滑川道夫。『赤い鳥』掲載作品に新作を加えた彼の第四作品集。遺作となったが、童話作家として彼が注目される機縁ともなった。民話的イメージを巧みに織り込んでいるところが「南吉童話」の独自性となって、本書にしても「ユーモアある善人性をもつ」とほけた盗人たちと純真な子どもが登場する「狂言風の味」を出している。*装幀・挿画：たになかやすのり谷中安規。戦時統制下の当時において5,000部の印刷が承認された。

西脇 順三郎 (1894–1982) :

□ 『Ambarvalia』(椎の本社, 昭和8年9月20日:1933) 石楠 〈函〉

＊解説者：鮎川信夫。＊1925年まで3年間ヨーロッパに滞在して新しい藝術運動に触れた収穫を本邦に移植すべく、1926年いらい発表してきた超現実主義的手法による作品など31篇を収めて『穀物祭』を意味する書名を冠した詩集で、サイン入り30部と300部限定版とが刊行された。＊本書での「ダダやシュルレアリスムの単なる亜流とは異なった独自の美学」は、モダニズム系の詩人はもちろんのこと朔太郎や犀星たちからも称賛されて、詩壇に「与えた影響力の大きさということになれば、西脇ほど傑出した詩人は他に類を見ない」くらいの成功を収めた。＊1966年5月1日に恒文社が初版を複製し、別冊を付けて¹⁵、サイン入り特製版で500部(3,000円)、署名無し限定版で1,000部(2,200円)を販売した。1970年9月30日には、名著刊行会が『稀観詩集復刻叢書・全10点(セット価5万円)に組み入れて複製している。＊日本図書センターが2003年に『愛蔵版詩集シリーズ』で「初刊のデザインの香り」を新字体で再現しようとした。＊参考：1947年8月20日に東京出版が再刊した『あむばるわりあ』では、西脇が全体にわたって筆を入れており、「初版本を眩ゆいものにした華麗なエキゾティズムと、新鮮な驚きの幾分かが失われ、かわりに、透明な愁いの影と、しめった土の香りの幾分かが賦与され」ていたので、「本文の異同から初版本の詩を理解する上で欠かせない貴重な異本」が提示されたことになる。

丹羽 文雄 (1904–2005) :

□ 『有情』(1953～62; ほるぷ出版, 昭和47年12月1日:1972) 自選 〈函〉

＊解説者：本人(巻末)・小田切進・瀬戸内晴美・新庄嘉章。＊「ムキになって自分の姿をさらけだした」心境小説『有情』(新潮社, 1962; 雪華社, 1964), 父親を「救われぬ存在」と捉えた『青麦』(文藝春秋社, 1953), 無意識に宗教世界へ回帰する『遮断機』(東西文明社, 1953)を集めると、丹羽という作家の

¹⁵ 西脇順三郎「近代人の憂鬱」(pp. 1–11) & 木下常太郎「Ambarvaliaについて」(pp. 13–28). 恒文社は1994年8月10日にも複製を税込5,500円で出版している。

全貌がほの見えるくるそうである。＊題字：著者本人。装幀・挿絵：羽石光志。

野上 彌生子 (1885-1985)： 本名小手川ヤエ、野上豊一郎と結婚。

□ 『お話 小さき人たちへ』 (岩波書店, 昭和 15 年 12 月 5 日：1940)

児① 児選

＊解説者：竹西寛子。＊「社会や民族についての〈ひろくてとらはれない理念〉を後日のために養おうとする意図」から、子供を侮らず子供に媚びず、実生活に根ざして血の通った語り掛けをするよう彌生子は求める。それで、収録の童話 23 篇は内容も多様で彼女の関心の広さを窺わせているが、そのうちの 10 篇は母親が咀嚼して子供に語り聞かせる鑑賞法を前提に執筆されている。

□ 『海神丸 其他』 (改造社, 大正 13 年 9 月 15 日：1924) 大正 函

＊解説者：瀬沼茂樹。＊彌生子の第四小説集。漂流という極限状況が引き起こした人間の内在させる高貴性と自然性との葛藤を通して、新しい人間関係に新しい人間解釈を模索しようとする問題意識を投影したのが「海神丸」であった。「多津子」と「所有」も併載。＊その後「海神丸」には字句の訂正が加えられて、岩波文庫 (1929) 版に由来する本文が今日では流布している。

□ 『人形の望』 (實業之日本社, 大正 3 年 8 月 31 日：1914) 児② ジ

＊解説者：瀬沼茂樹。＊^{あいし}愛子叢書。の第五編。¹⁶ オリンポス山で靈魂を授けられたイタリア人形、イギリス人形、フランス人形、京人形によるそれぞれの望みを通して、美より智慧が大切なことを論ず。オリンポス山で思い起こされるのは、彌生子が本書刊行の前年に Thomas Bulfinch 著 *The Age of Fable* (1855) を邦訳した『傳説の時代』 (尚文堂) を出版していたつながりである。

□ 『昔がたり』 (1907-68; ほるぷ出版, 昭和 47 年 12 月 1 日：1972)

自選 函

＊解説者：本人 (巻末)・小田切進・有吉佐和子・布川角左衛門。＊「『海神丸』後日物語」を含む佳作 10 篇を集めて本人が解説を寄せた短篇集。なお収録の^{えにし}「縁」は、習作であった「明暗」が漱石によって落第点を付けられたので¹⁷、暫

¹⁶ ちなみに「愛子叢書」で刊行された 5 書目のすべてが児②セットで複製されている。

¹⁷ 没後の 1988 年 1 月 25 日に住居内で原稿が発見されて、同年 7 月 25 日には岩波書店

定的に処女作と見做されていた。＊題字は彼女の揮毫で、装幀と挿画は中川一政。＊ちなみに竹西寛子は、『お話』を解説した際に、野上文学では「知識人や芸術家の運命を、権力者あるいは権力体制との絡みにおいて表現する」傾向にあり、しかも女流作家としては特異なことながら、「特定の主義主張や運動によらない政治的発言」を弄しがちであったことを教えている（p. 184）。

野口 雨情（1882－1945）：

本名英吉。

- 『十五夜お月さん』（尚文堂、大正 10 年 6 月 5 日：1921）**児①****児選** 〈函〉
＊解説者：藤田圭雄^{たまお}。＊創作民謡詩を 71 篇集めた第一童謡集。本居長世作曲の譜面、岡本歸一の挿絵で構成されているが、半数は雨情が社員として雑誌『金の船』（キンノツノ社）に発表してきた作品から転載された。翌年 8 月の第 10 版には「台覧 文部省認定」と加刷され、収録作品や構成が変更された由である。

萩原 恭次郎（1899－1938）：

本姓萩原→金井。筆名葉歌。萩原朔太郎は同郷の先輩詩人。

- 『死刑宣告』（長隆舎書店、大正 14 年 10 月 18 日：1925）**特選**/**石楠** 〈函〉
＊解説者：壺井繁治／磯田光一。＊『日本近代文学図録』（1964）によれば、大正末期～昭和という近代詩の変革期にあって、「アナーキストの詩人たちは、資本主義への抗議と憎悪にみちたダダイズムの詩を発表」（p. 298）していた。そして恭次郎も、未来派をイタリアから移植して夭逝した平戸廉吉の唯一人の継承者として、「一人のインテリゲンチヤの近代資本主義社会にたいする絶望の抗議」（壺井）たる前衛詩 83 篇を収めた第一詩集を出版した。＊「アヴァンギャルド運動の雰囲気の色濃く漂わせた造本で、岡田龍夫、村山知義ら当時の前衛的な画家等多数によって装幀」されて、意表を衝く挿画であり本文のレイアウトでもあった。同様に磯田も、「それぞれのページの視覚的な効果をはじめ、造本や装丁までを含めて、ともかくも一つのエポックをつくった詩集」と評している。＊斬新さが好感されたようで、翌年 2 月 10 日には化粧断ちされた再

により『自筆稿本 明暗』として複製された（34,000 円）。

版が出た。＊1970年9月30日に名著刊行会の『稀観詩集復刻叢書』全10点（セット価5万円）に収録されたが、それに稲垣達郎が『石楠』の『解説』（p.172）で「初版の復原からは遠い」と駄目を出した。表紙の再現があっさり気味で、用紙や印刷にも問題があるのであろう。＊日本図書センターが2004年に『愛蔵版詩集シリーズ』で「初刊のデザインの香り」を新字体で再現しようとした。

萩原 朔太郎（1886－1942）：

学生時代の筆名萩原美穂^{みきお}。

□ 『青猫』^{あおねこ}（新潮社、大正12年1月26日：1923）

〔大正〕〔新選〕／〔山茶〕／〔珠⑧〕 〈函〉

＊解説者：篠田一士／伊藤信吉／篠田。＊「近代のデカダンスの感受性」と「日常語にできるかぎり接近」することで「近代詩とよぶのにふさわしい詩的世界をきりひらいた」と篠田が評した『月に吠える』に次いで、本書は第二詩集になる。自装を理想とした朔太郎ならではの装幀で、挿画も4葉を収める。また、「自由詩が解らないと言ふ人」（凡例）のために併載された49頁ある「自由詩のリズムに就て」は啓蒙的である。＊伊藤によると、新潮社の拙速な編集に不満を抱いた朔太郎は、昭和11年（1936）年3月20日に版畫莊から『定本 青猫』として再刊した。本文には「かなりの異同があり、別本と考えねばならない」らしく、巻末でも「私を批判しようとする人々や、他の選集に抜粋しようとする人々は、今後すべて必ずこの「定本」によつてもらひたい」と宣言されている。＊〔大正〕発売より1年前の1968年5月15日に、求龍堂が『定本』のほうを複製し、政治公論社「無限」編集部が1,000部を販売（3,000円）していた。＊要注意：ほるぷ出版の『日本の文学』（1985）は複製本ではない。

□ 『ソライロノハナ』（自筆自装本、大正2年4月頃：1913）〔新選〕^付

＊解説者：小田切進・萩原葉子。＊まだ無名であった27歳の朔太郎が自作の短歌から423首を書き写した、おそらく一冊しか造られなかった手製本（ノンブル無し）で、没後35年が経った1977年に発見された。「晶子・白秋・牧水・啄木の影響が指摘され」（小田切）ている本文は、1978年4月25日に筑摩書房版『萩原朔太郎全集』の第15巻で活字に翻刻（pp.3－104）されたので、本書には初出本としてではなく手造りの形状が復元された資料としての興味と意義

がある。＊**新選**第27刷（第三版初刷，1985年9月1日）の『作品解説』で、付録の解説が「**永日小品**」用から『ソライロノハナ』向けに差し替えられている。翌月の10月1日には、『自筆歌集「ソライロノハナ」複製版』として9,200円で分売された。更に、奥付の記述に従うならば、1988年11月1日に「第26刷特別付録」として『ソライロノハナ』が（売価表示無しで）再刊されているが、第26刷の在庫分または購入者に向けた付録に転用するためであったかもしれない。＊手製本発見の顛末については、第27刷『作品解説』および分売本や再刊本に封入された10頁の「解説」において朔太郎の長女葉子が伝えている。

□ 『月に吠える』（感情詩社&白日社出版部，大正6年2月15日：1917）

大正 **精選** / **紫陽** **珠⑧** 〈函・ジ〉

＊解説者：伊藤信吉／那珂太郎。＊56篇を7章に分けて収めたこの第一詩集が、「近代人の精神的孤独の感情を中心にして，主題の設定，感覚の作業，創造的詩語，新鮮なスタイルなど，すべてその新しさにおいて，近代詩の途を現代詩の方へとひらいた」（伊藤）。しかし刊行直前に、「愛隣」（pp. 103-105）と「戀を戀する人」（pp. 106-108）が風俗壊乱に該当すると内務省から通知されて，6頁分が切り取られて発売された。＊**白秋**が序文，**犀星**が跋文を寄せている。恩地孝四郎が装幀と挿画，田中恭吉が口絵・挿画・ジャケットの「夜の花」を描いた。¹⁸ 初版の500部は短期間で完売になった。＊当初，文学館は恩地の遺族から借用した無削除版を複製の底本に用いたが，**精選**の第13刷（1982年4月1日）以降と**紫陽**（1983）では「新たに管見に入った無削除版（**日夏家本**）を底本とした」と**紫陽**の『解説』は告げて，市販された削除版 vs 恩地本 vs 日夏家本の異同に触れている（pp. 164-65）。その後**珠⑧**（1985）でも日夏家本が複製されていた。＊日夏家本では目次＋制作関係者リスト（pp. 1-10）が巻末から巻頭に移されるなど，恩地家本「より完全な形と見なされる」らしいが，両無削除本に特筆すべき違いは無さそうである。＊1965年8月5日に大和書房が，冬至書房纂修で「初版・復原版」を1,000部刊行（1,500円）している。無削除で目次他（pp. 1-10）は巻末にあるが，本文には（朔太郎の他作品がそ

¹⁸ 『装丁』（1998）所収の伊藤信吉「田中恭吉・恩地孝四郎と萩原朔太郎の往来」に拠る。

うであったように）読点が全く用いられておらず、活字にも形状の違いが見られるので、新組みの〴復原。版だったのであろう。ジャケットを欠いている。

＊また 1968 年 12 月 24 日に求龍堂が複製し、政治公論社「無限」編集部が 1,000 部限定で販売（3,000 円）した〴翻刻版。では pp. 103-108 が切り取られて「その筋の注意により…」という一葉の告知が綴じ込まれている。ジャケットもあり、流布本が底本にされたようだ。＊日本図書センターが 1999 年に〴愛蔵版詩集シリーズ。で「初刊のデザインの香り」を新字体で再現しようとした。＊要注意：はるぶ出版の〴日本の文学。 (1985) は複製本ではない。＊参考：萩原葉子(編)『『月に吠える』時代の草稿詩篇』(雪華社 1971) は、未発表の 46 篇について草稿を複製し、その活字版を添えるが、斎藤正二の解題によると、『月に吠える』所載の幾篇かの原形らしい作品が含まれており、朔太郎が山村暮鳥や大手拓次から受けた影響を吟味するのに有効な資料になるそうである。

- ^{ひょうとう}『氷島』(第一書房、昭和 9 年 6 月 1 日: 1934) 石楠 珠⑧ (函)
- ＊解説者：伊藤信吉。＊文語詩 21 篇に旧作「郷土望景詩」から 4 篇を加えて「詩篇小解」を併載した第六詩集。妻に出奔された朔太郎にとって「人生的な陥没期の作品集」であり、彼の「芸術生涯を通じて、『氷島』ほど生活的現実をさらけ出した作品はない」とされるが、『月に吠える』や『青猫』でのように口語調になっていないのは、〴絶叫。するには語気が足りないと感じたからであるらしい。＊自装で 1,000 部刊行。＊1968 年 2 月 28 日に求龍堂が複製して、政治公論社「無限」編集部が 1,000 部を販売（2,000 円）した。1980 年 7 月 1 日にも雑誌『季刊無限ポエトリー』第 8 号が扉から奥付まで全頁を複写している (pp. [25] - [110])。＊参考：1963 年 3 月 20 日に冬至社が、本作の 18 篇と「郷土望景詩」1 篇の原稿 (29 葉¹⁹) を『『氷島』詩稿』と題して 350 部を複製し、伊藤がまとめた別冊 (34 頁) に初版に依る本文と、朔太郎執筆の『『氷島』の詩語について』を収めて、1,200 円で販売した。同社は 1968 年 9 月 5 日にも新版 (30 葉) を 1,200 円で 500 部再刊している。

¹⁹ 原稿用紙の左半分に「『氷島』詩稿」、右に署名の入った 1 葉を欠く。国会図書館の OPAC も 29 枚で記述している。しかし 1968 年の新版ではその 1 葉が補われている。

初山 滋 (1897-1973) :

本名繁藏。

□ 『たべるトンちやん』(金蘭社, 昭和 12 年 12 月 25 日: 1937)

児② 児選 〈函〉

解説者: 堀尾青史^{せいし}。 児童文学といえば『生活童話』が幅を利かせていた当時にあって、写実を排し洒脱にスケッチされたブタが各頁に闊歩している。縦横に流れるひらかな文から「ことばの唐突さや擬声がパッとひびいて、そのあとでおかしさが生まれ、見開きページいっぱいにはじわと遊びの気分がただよ」って、のほほんとした気分にさせてくれる。* よるひるプロが 2005 年 10 月 25 日に子息斗作^{とさく}筆の回顧録(4 頁)を添えて複製(2,300 円+税)した。

濱田 廣介^{ひろすけ} (1893-1973) :

本名廣助。筆名赤名晨吉。

□ 『大將の銅像』(實業之日本社, 大正 11 年 11 月 1 日: 1922)

児① 児選 〈函〉

解説者: 滑川道夫。 『棕鳥の夢』に続く『ひろすけ童話』の第二集で、「愛情と善意とが、創作民謡・童話に端的に見られる日本リリズム」を基調にした 13 篇を収める。* 序文: 島崎藤村。装幀: 竹久夢二。口絵: 川上四郎。

□ 『棕鳥の夢』(新生社, 大正 10 年 8 月 26 日: 1921) 大正 〈函〉

解説者: 滑川道夫。 善意と愛を基調とした『ひろすけ童話』の第一作品集。
* 口絵は川上四郎。* 彼は「簡明な表現をもとめて」推敲を繰り返すので、「決定稿は、おそらく最後の全集にまたなければならない」とも言われている。しかし、没後に『浜田廣介全集』全 12 巻(集英社, 1975~76)が実現しているので、本書で読み比べる愉しみが手近に実現する。* 『わくわく! 名作童話館』(日本図書センター, 2006)での復刻は文字遣いや装幀が現代化されている。

林 芙美子 (1903-51) :

本名フミコ。筆名秋沼陽子。

□ 『蒼馬^{あおうま}を見たり』(南宋書院, 昭和 4 年 6 月 15 日: 1929) 石楠

解説者: 小笠原克。 「無邪気で楽天的と見えるほど稚鈍」なところのあった「奔放な女給詩人」が、小説家として自立する以前に、いわば「殺風景な実生活を巧みな韻でむすんで詩化した才能」を発揮させて雑誌に発表してきた 33

篇を集める。その3分の1が『放浪記』に再利用された。＊自序の他に、石川三四郎と辻潤から序文を得ている。＊日本図書センターが2002年に『愛蔵版詩集シリーズ』で「初刊のデザインの香り」を新字体で再現しようとした。

□ 『放浪記』（改造社、昭和5年7月3日：1930）〔昭和〕〔精選〕

＊解説者：和田芳恵。＊『新鋭文学叢書』の第3編。美美子の幼少から手塚緑敏りよくびんと新家庭を持つまでを詩入りの日記風に連作した自伝的小説。謂うところのルンペン・プロレタリアの娘らしいニヒリズム色を濃くさせながらも、「底抜けに明るい表現」が持ち味になっている。同第17編『續放浪記』（1930）と『放浪記第三部』（留女書店、1949）が追隨した。＊ゆまに書房が1998年5月22日に『新鋭文学叢書』（全28点セット価168,000円）で『放浪記』と『續放浪記』を複製した。＊要注意：ほるぷ出版の『日本の文学』（1985）は複製本ではない。

葉山 ^{よしき}嘉樹（1894－1945）：

□ 『海に生くる人々』（改造社、大正15年10月18日：1926）〔昭和〕〔精選〕〈ジ〉

＊解説者：小田切進。＊早稻田の文科を中退してから、「セメント工場の手紙」（1926）でもそうであったように、自らの経歴に取材して「庶民的な滋味あふれる作風を示し」てきた。その彼が労働運動との関わりで千種刑務所（名古屋）に服役した大正12年頃に、海上労働者の悲惨な生活を『海に生くる人々』と題して共感的に描き「美しい抒情詩」のような長篇小説に仕上げたことにより、「プロレタリア文学の成立を芸術的に示す記念碑的作品」とまで称されるようになった。＊要注意：ほるぷ出版の『日本の文学』（1985）は複製本ではない。

樋口 一葉（1872－96）： 本名奈津、なつ、夏子。筆名浅香のぬま子、春日のしか子。

□ 『真筆版 たけくらべ』（博文館、大正7年11月23日：1918）

〔明前〕〔新選〕／〔CatH〕〈函〉

＊解説者：塩田良平／十川信介。＊『伊勢物語』の「筒井筒」にちなんだ題名が暗示するように、『近代文学名作事典』（1967）によると、「遊女と僧侶の悲恋」という伝統的なロマンスの明治版で、その中に作者の体験・心情を生かした作品であった。＊『文学界』が明治28年（1895）1～3、8、11、12月、29

年1月に掲載したのち、『文藝倶楽部』が明治29年4月に一括再掲することになって、一葉が(pp. 85-88以外を)書写して朱でルビを入れた原稿を用意した。それを大正になって馬場孤蝶が60%に縮小複製して『真筆版』としたのが本書で、鐫木清方(口繪)、幸田露伴(序)、島崎藤村(序)の他、泉鏡花、佐佐木信綱、平田禿木、戸川秋骨等々『文學界』の同人が文章を寄せた。原稿は毛筆書きなので、活字本の援けも欲しいところではある。²⁰ *参考: 1942年10月20日に、^{よもぎ}四方木書房が「解讀用」別冊に小島政二郎の解説を添えて原稿を実寸大(19×12cm)で1,500部複製(9圓50銭)した。えくらん社も1958年10月10日に^ゝ肉筆版選書、で四方木書房版を、解説を奥信一郎に換えて、1,000部複製(1,450円)した。1982年8月には講談社が木村莊八の画本とセットにした複製本『一葉たけくらべ絵巻』(208,000円)を出した。彼女が五千円紙幣の肖像に採用された2004年には、日本学習図書が6月30日に四方木書房版を再版(10,000円+税)。*1991年になると、大正いらい行方不明になっていた一葉の書写稿が発見され、2005年3月に二玄社が山梨県立文学館の監修で『直筆たけくらべ 完全複製』を原色原寸で300部販売(68,000円+税)している。*要注意: ほるぷ出版の^ゝ日本の文学。(1985)は複製本ではない。

ビゴー、ジョルジュ [Bigot, Georges] (1860-1927):

□ 『La Journée d'une Gueisha à Tokio』(明治24年: 1891) 精選^付 〈和〉

*解説者: 匠秀夫。*パリでの浮世絵ブームに浮かされて明治15年(1882)に来日した「画師美好」は、滞日18年間に明治期の活気ある庶民生活を共感的に、支配階層の俗物性を諷刺的にスケッチして²¹、日本観光の恰好な土産物 & 居留地発の定番的輸出品を創出した。*吉原に取材した石版墨刷24点を13丁に収めた和本『東京藝者の一日』はビゴー・ブランドの逸品で、永井荷風も愛蔵した。何しろ「外国人によって見た当時の日本世相の珍重すべき活写」(内容見本)

²⁰ 和泉書院版^ゝ近代文学初出復刻。の、山本洋(編)『樋口一葉集』(1984年5月15日)は、『文學界』から「たけくらべ」掲載頁を複写していて、本文の比較にも好都合。

²¹ 清水勲(編)『続ビゴー日本素描集』(岩波文庫、1992)によると、別版『藝者の一日』(1899)他四十冊近い画集と百数十冊の雑誌を出し、素描は二千点近くに及んでいた由。

になっていたから、日本人の典型的なイメージを西欧に伝播し定着させるのに大いに貢献したであろう。＊1962年10月1日には真珠社（川崎）が、フランス語のキャプションを邦訳して縮小図版の複製本を100部のみ拵えていた。

日夏 耿之介（1890－1971）： 本名樋口國登，園登。

- 『轉身の頌』（光風館書店，大正6年12月10日：1917）山茶 〈函・ジ・挿〉
- ＊解説者：窪田般彌。＊この第一詩集は萩原朔太郎の『月に吠える』と同年の刊行で、「日本における真の象徴詩の黎明を告げる」ほどの業績であったが、その術学的な趣味を批判されることも多かった。『日本近代文学図録』（1964）は「苦悩から信仰への道程を，思念的神秘的に詩化，その高踏的態度は，詩界に波紋」（p. 275）を及ぼしたと解説し，窪田は「耿之介は朔太郎とともに白露の次の時代を代表する象徴派の詩人となった」と評している。＊底本は長谷川潔が装幀し挿画を描いた100部限定の豪華本であった。＊1972年8月20日に中央公論美術出版が関川左木夫の別冊解説を添えて300部複製（3万円）した。

平戸 廉吉（1899－1922）： 本名川畑正一。

- 『平戸廉吉詩集』（平戸廉吉詩集刊行會，昭和6年12月12日：1931）石楠
- ＊解説者：千葉宣一。＊廉吉は「詩におけるモダニティの方法的探求に苦悩」しながら結核と生活苦の中で若くして悲惨な最期を迎えた。没後13年になって，萩原恭次郎たち未来派運動の後継者の尽力のおかげで，唯一の詩集が実現した。
- ＊装幀は刊行責任者であった神原泰，跋を寄せたのは支援者の川路柳虹。推奨100部印刷。＊廉吉が1921年10月頃に街頭で撒いたとされる「日本未来派宣言運動」と題したビラが，読み取り困難な縮小率で口絵に綴じ込まれている。

廣津 和郎（1891－1968）： 廣津柳浪の次男。

- 『作者の感想』（聚英閣，大正9年3月20日：1920）大正 〈函〉
- ＊解説者：稲垣達郎。＊固定概念には囚われず実見してから思考するという人生派的な批評は当時には斬新だったから，この第一評論集は「佐藤春夫の『退屈讀本』（1926）と並んで大正期評論の双璧」とも目された。収録24編のなか

には、志賀を論じた最初である「志賀直哉論」(pp. 263-90) も見られる。

廣津^{りゅうろう}柳浪 (1861-1928) :

本名直人。号蒼々園。

□ 『河内屋』(春陽堂, 明治39年6月1日:1906) 明前 (和・ジ)

*解説者: 岡保生。*悲惨小説の第一人者が、会話を通して性格描写を果たし物語の展開も図るという新工夫の手法を試みての中篇。春陽堂で露伴が編集した『新小説』の第3号(1896年9月)に全17章が一括掲載されたのが本作の初出であった。*蚊帳を思わせる装幀が風趣を誘い、まるで障子を擬したような半透明の雲形模様入りグラシン紙がジャケットとして被せられている。

福澤 諭吉 (1834-1901) :

□ 『學問のすゝめ』初編(慶應義塾出版局, 明治5年2月:1872) 明前^付 新選

*解説者: 富田正文。*そもそもは、福澤の郷里大分に新設された中津中學校のために彼が筆を執った24頁の小冊子。著者に名を連ねている小幡篤次郎は彼の高弟で、そこの校長に就任した。本書は人間の尊さを教え、正しい社会が新しい学問から実現されることを論じて全国で評判になり、明治9年まで書き継がれて、『日本近代文学図録』(1964)が引用するところでは、結局「第十七編合して三百四十萬冊は國中に流布した」(p. 220)らしい。*初編は木版刷りらしく和本に近い装幀で、奥付は無く「端書」が見られる。*要注意: 初編は変体仮名に慣れる頃合いの教材にもなるが、明治13年の合本版は『学問のススメ: 国会図書館所蔵図書』としてオンデマンド出版(ゴマブックス)されているものの、漢字カタカナの活字印刷で温もりに欠ける。

□ 『世界國盡』^{くにづくし}6冊(慶應義塾出版局, 明治2年8月:1869) 明前 (和)

*解説者: 富田正文。*亞細亞洲、阿非利加洲、歐羅巴洲、北亞米利加洲、南亞米利加洲・大洋洲、附録の6冊からなるが、『日本近代文学図録』(1964)によれば、「七五調で書かれており、人々はこぞってこれを誦誦した」(p. 220)そうである。*近代化を目指した啓蒙の内容を盛っているが木版多色刷りの和本と、製本技術が未熟であった時代の雰囲気を残している。本文は毛筆書体ながら、地名には仮名が振られて庶民への配慮が見られる。最終巻に奥付あり。

二葉亭 四迷 (1864-1909) :

本名長谷川辰之助、号冷々亭杏雨。

□ 『浮雲』 第一篇・第二篇 (金港堂, 明治 20 年 6 月, 21 年 2 月 : 1887, 88)

明前 新選

*解説者：稲垣達郎。*主人公の失職を契機に変化する人間関係の心理に触れながら、『近代文学名作事典』(1967)によれば、「内面的な生活をもたず、生きる意志とは無関係に、ただ時代の波のままにゆらめくもの」の生息を風刺的に描く。また、「曾てぢやらくらが嵩じてどやぐやと成ツた」(第一篇, p. 60)といった言文一致体は斬新で読者の意表を衝いたのではなからうか。流布している本文の表記より前の二葉亭による句読法が保存されている。*坪内雄藏(逍遙)の名義を借りて出版されたが、第二編の奥付は長谷川辰之助と連名になった。第三篇(1889)は二葉亭名義で『都の花』に発表されたが単行本化されなかった。*要注意：ほるぷ出版の『日本の文学』(1985)は複製本ではない。

文藝新聞：

□ 『日本文士階級鑑』^{かがみ} (文藝新聞社, 明治 40 年 3 月 1 日 : 1907) 明後 付

*解説者：伊藤整。*相撲の番付表に擬して文章家と小説家に分けた格付け表。『文藝新聞』については詳らかにしないが、徳富蘇峰と廣津柳浪が勧進元になり、主要紙記者の合議に基づいて編輯された臨時増刊號の第二版という触れ込み。ちなみに、三宅雪嶺が文章家の、小杉天外が小説家のそれぞれ『大關』に格付けられている。*新聞紙大片面刷りの一枚物で、定價 5 錢であった。

堀口 大學 (1892-1981) :

□ 『月下の一群』 (第一書房, 大正 14 年 9 月 17 日 : 1925) 大正 連翹 〈函〉

*解説者：河盛好藏。*象徴派詩人全盛時代のフランスに滞在して、気に入った詩に出遭えば日本語に移して掌中に収めてきた堀口が、66 詩人 340 余篇を本書に収録した。河盛は、西洋詩の翻訳において「初めて『海潮音』の呪縛から脱することができた」と称賛する。いっぽう『近代文学名作事典』(1967)は、訳詩が「当意即妙、新鮮な日本の詩語としてみごとに再創造されたところに、昭和初期の新詩運動に強力な影響を与えた」と、その将来性を評価する。*装

幀を担った長谷川巳之吉は、版元の創業者兼詩人であったが、本書のために「豪華本」という便利な用語を発明して詩集出版をビジネスに結び付けた。扉絵の木版画は長谷川潔による。藤田嗣治も挿絵を描いた。菊判 758 頁で売価 4 圓 80 銭の「豪華本」は数ヶ月で 1,200 部を完売し、その後も紙型が潰れるまで増刷された。更に「連翹」の『解説』（p. 175）によると、刊行当初には総和紙製 7 冊、三方金総革本も 2 冊造られたらしい。＊今回の複刻では、刻印用の金版制作も含めて原本の忠実な再現が試みられ、工藝品のような複製本が実現している。＊堀口は、1928 年に多少の増補を施した四六判 716 頁の『新編 月下の一群』を第一書房から、1952 年にも白水社から A 5 判 632 頁の新版を再刊させていた。

□ 『月光とピエロ』（昶山書店、大正 8 年 1 月 1 日：1919）「紫陽」 〈函・ジ〉

＊解説者：平田文也。＊かつて堀口は、この自らの処女詩集を「病弱な遊子の異国流離の泣きごとがこの集の主調をなす」と評したそうであるが、西洋詩に由来する知性に支えられて、「従来の日本の詩に見られるような陰湿さは少しもなく、むしろかるがるとして明るい悲唱となって、読む者をして吟誦させずにはおかない快い響きさえある」と、平田は解説する。＊日夏耿之介が差配し、長谷川潔が装幀と木版画を担った。パラフィン紙がジャケットに用いられている。自費出版で印刷は 300 部のみ。＊日本図書センターが 2006 年に「愛蔵版詩集シリーズ」で「初刊のデザインの香り」を新字体で再現しようとした。

堀 辰雄（1904－53）：

□ 『風立ちぬ』（野田書房、昭和 13 年 4 月 10 日：1938）

「昭和」新選／「SONY」／「CatH」 〈函〉

＊解説者：佐々木基一^{きいち}／池内輝雄／菅野昭正。＊日本近代文学において「人間が内面的にいかにも深い生をいとなむことができるかを描くリアリズム」を確立させた作家であった堀の代表作とされている。既刊の『風立ちぬ』（新潮社、1937）に「死のかげの谷」が新たに終章として加えられて、1938 年に 500 部のみ出版された版がそのまま今回の複刻では原本にされた。＊要注意：ほるぷ出版の「日本の文学」（1985）は複製本ではない。

- 『聖家族』（江川書房，昭和7年2月20日：1932）**〔特選〕** 〈函・函〉

*解説者：佐々木基一。*実際に1924～25年に軽井沢で二夏を過ごした4人，すなわち本作では「堀辰雄自身を思わせる河野扁理と細木夫人 [= 松村みね子，本名片山廣子] と絹子 [= 廣子の娘總子，筆名宗瑛] との織りなす恋愛の複雑な心理を，九鬼 [= 芥川龍之介] の死を媒介として描いて」おり，そこでは「愛の純化による死の乗り越え」が目指されている。横光利一が序を寄せている。
***〔特選〕** で用いられた原本は，350部の普及版ではなく，150部の著者サイン入り上製本のほうで，フランス装アンカット本の仮表紙にケースは清楚な白地。

- 『堀辰雄詩集』（山本書店，昭和15年10月25日：1940）**〔石楠〕** 〈函・挿〉

*解説者：佐々木基一。*挿み込みの「立原道造君」が記しているように，早逝した立原が堀の詩から3篇を選んで小冊子に筆写して，画家の深澤紅子に託していた。堀はそれに深澤の挿絵を添えて趣味的な未綴本に拵え，立原追慕のために180部のみ印刷した。小説家として認められる以前の堀はフランスの文人 Jean Cocteau (1889-1963) に傾倒して感性の素地や異化の手法を学んでいたが，詩作方面での名声は求めていなかったようで，本書が生前唯一の『堀辰雄詩集』であった。*奥付の手前頁には縦書きで「百八十部限定印刷 / A 深澤紅子肉筆水彩画一葉及カット挿入。三十部（一～三〇） / B 深澤紅子手彩デッサン一葉挿入。百五十部（三一～一八〇）」とある。*1966年6月25日に大和書房が，冬至書房の纂修で「初版・復原版」をA 100部（売価不明），B 500部（1,200円）を出しており，やはり深澤の装幀ながら，書名は左横書きにされ，カットや配置も異なって，趣味的な面での印象を多少異にしている。

榎本 楠郎（^{くすろう}1898-1956）：

本名楠男。

- 『赤い旗』（紅玉堂書店，昭和5年5月5日：1930）**〔児①〕〔児選〕**

*解説者：菅忠道。*序文が「君たちも勇敢なプロレタリア闘士となつて，君たちや君たちのお父さんお母さんを苦しめてゐる奴らを叩きのめしてくれ！」といった調子で，日本のプロレタリア児童文学の嚆矢の作品集ではあったらしいが，発禁にされたため残存部数が少ないそうである。榎本による「プロレタリア童謡の活用に関する覚書」（pp. 94-104）を併載する。*装幀：^{よく？}村田意。

楨本 楠郎・川崎 大治（1902－80）：

川崎の本名池田政一。

□ 『小さい同志』（自由社，昭和6年7月25日：1931）**児②**

＊解説者：菅忠道。＊表紙に「ヂヌシバカヤロ」の落書きがデザインされた，労働者や農民の子弟のための童謡集で，プロレタリア児童文学運動に意欲的な9作家による作品48篇を収める。即日発売禁止の処分を受けたが，地下では頒布され続けたそうである。＊刊行当初から伏せ字にされた24箇所の××が**児②**の『解説』に復元されている。＊装幀：室順治。口絵：鈴木賢二。

正岡 子規（1867－1902）：本名^{つねのり}常規，幼名^{のぼる}升，号^{ところ}処之助，^{だっさいしょおく}獺祭書屋主人，竹の里人。

□ 『子規句集』（俳書堂・昶山書店，明治42年6月20日：1909）**山茶**

＊解説者：村山古郷。＊^{だっさいしょおく}子規遺稿。としては第五篇にあたる。子規は生涯に2万句を詠んだらしいが，高弟の^{かわひがし}高濱虚子と河東碧梧桐が遺稿中の1万余句より1,237句を選び，季題別に配した。写生的を唱えていたこともあって，「子規の句はずば抜けて個性味の濃い句は少なくて，平明淡泊」であったから，大正～昭和初期には人気が凋落したが，戦後に再評価を得た。＊^{だっさいしょおく}子規俳句集、が予告倒れになっていたのに乗じて，門弟でもない瀬川疎山が3,889句を集めた『子規句集』（文山堂）を明治41年10月1日に出して，本書の実現を促した。

□ 『竹の里歌』（俳書堂，明治37年11月13日：1904）**石楠**

＊解説者：久保田正文。＊伊藤左千夫たち7名の門人が，子規の自筆稿本に遺された2,000首と最晩年の作品から，短歌544，長歌15，旋頭歌12首を選んで^{だっさいしょおく}子規遺稿。の第一篇とした歌集。『近代文学名作事典』（1967）は「編年体で，連作が多く，詞書を多く載せ，歌日記的印象もある」と紹介する。＊本書が齋藤茂吉に和歌を詠ませる切っ掛けになったらしい。＊自筆稿本は一時行方不明であったが，1954年になってひょっこり現れて，1976年9月6日に講談社が『竹乃里歌』として478部を複製（28,000円）した。＊参考：岡野弘彦「自筆本「竹乃里歌」のゆくえ」『子規全集 別巻三：月報24』講談社1978年3月18日 pp. 8－10。再発見の当事者が経緯を後世のために記録に残した文書。

□ ^{だっさいしょおく}『獺祭書屋俳話』（日本新聞社，明治26年5月21日：1893）**明前** 〈和〉

＊解説者：楠本憲吉。＊子規が俳句に関する蘊蓄を傾けた随筆的な俳諧史論集

で、彼は陸羯南くがつなんが興した新聞『日本』に連載した俳句革新のための旗上げの著述であった。*日本叢書。として単行本化されたのが本書。***明前**で複製された初版は71頁しかなかったが、明治28年9月5日の再版（弘文館）では215頁、没年の明治35年11月7日付増補第四版（同）では442頁と、着実に内容を膨らませていった。*参考：司馬遼太郎の『坂の上の雲』（初出1968～72）では「十七夜」の章（文春文庫ならば第3冊目）まで子規が登場する。

正岡 子規かわひがし・河東 碧梧桐・高濱 虚子：

□ 『春夏秋冬』4冊（明治34～36年：1901～1903）**紫陽**

*解説者：福田清人。*陸羯南くがつなんが経営した新聞『日本』の「日本俳句」欄で子規が選句してきたうちから、明治30年（1897）以降の投句者360名による3,568句を集成しており、「日本派写生俳句が完成した業績の金字塔」とも目された4冊セットで、*俳諧叢書。の第七～十篇にあたる。そのうち『春之部』（ほとゝぎす発行所、明治34年5月25日）は子規自身が編集したのであるが、病いが重くなってからは碧梧桐と虚子が引き継いで『夏之部』（俳書堂&大阪：文淵堂、35年5月15日）・『秋之部』（文淵堂、同9月7日）・『冬之部』（文淵堂、36年1月12日）を編集した。ところが両編者の足並みが揃わず遅延がちで、子規が『冬之部』を見届けることはなかった。完結には漕ぎ着けたものの、「翌年から、碧梧桐の現実主義的方向を虚子は批判し遂に二人は岐路を歩くに到った」（福田）。*大正4年（1915）2月5日には合本版（俳書堂）も発売された。

正宗 白鳥（1879－1962）：

本名忠夫。筆名劔菱、影法師など。

□ 『紅塵』（彩雲閣、明治40年9月22日：1907）**明後**

*解説者：和田謹吾。*内村鑑三の影響を受けながら、彼は60年の執筆活動を通して小説・評論・戯曲・回想等々で100冊以上を著して、文化勲章も受けていた。それらの作品には「生活にも仕事にも恋にも宗教にも酔えぬ人間を見据える作者の冷酷な観察眼と、虚無的な索漠たる精神が流れていた」（和田）ので、この最初の短篇集に収録された市井の生活や妖気の漂う世界に取材した12篇についても同様の傾向が指摘されてきた。*雑誌に発表して好評を博した「塵

埃」と、彼が好んだ（白ではなくて）紅を合体させて書名にした由である。

眞山 青果（1878－1948）：

本名^{あきら}彬。

□ 『平將門』（新潮社，大正 14 年 3 月 12 日：1925）大正

＊解説者：秋庭太郎。＊奔放狷介な性格から原稿の二重売り事件を起こし，文壇を離れた間に近世文藝の研究に打ち込んだ青果は，緻密な考証に基づく作中人物に自らの主張を語らせる手法を本作で試み，「大正期の戯曲の傑作」と評される「性格悲劇」に仕上げ，劇作家として堂々の復活を果たした。『坂本竜馬』（大日本雄辯會講談社，1928）と共に彼の代表的歴史劇と評されている。

丸山 薫（1899－1974）：

□ 『帆・ランプ・鷗』（第一書房，昭和 7 年 12 月 5 日：1932）石楠 〈ジ〉

＊解説者：安西均。＊この第一詩集収録の 34 篇ちゅう三分の一が海のイメージを漂わせており，丸山は「海の詩人。」と呼ばれるようになった。しかし，東京高等商船学校で適性が無いと判定された彼は，第三高等学校文科丙類に転校したために，海員としての経歴を有していなかった。つまり海への「灼けつくような郷愁」が彼を詩人にしたのであり，描かれているのは「青春の想念が生んだ〈海〉のイメージにはかならない」ことになる。＊500 部限定で出版された。＊石楠の装幀でも，褐色のパラフィン紙が被せられ糊付けされているのは原本通りなのであろう。＊1965 年 8 月 20 日になって冬至書房が，丸山の「あとがき」を添えた「定本」を 500 部だけ再刊（500 円）したが，書名は左横書きにされており，詩行での句読点はなくなり，作品も多少入れ替わっている。

三木 露風（1889－1964）：

本名操。

□ 『^{しま}眞珠島』（アルス，大正 10 年 12 月 18 日：1921）兎② 〈函〉

＊解説者：安部宙之介。＊「^{ちゅうのすけ}白秋・露風時代」を築いたカトリックの象徴派詩人が，『赤い鳥』に刺激されて大正 7～10 年に執筆した 75 篇を収める第一童謡集。山田耕筰が曲を付けた「赤とんぼ」も含まれる。＊挿画は初山滋。＊生誕百年目の 1989 年 4 月に，童謡の里龍野文化振興財団（兵庫）が関係者の了

承を得て、家森長治郎執筆の別冊解説（18 頁）を添えて複製（売価不明）した。

□ 『**廢園**』（光華書房，明治 42 年 9 月 5 日：1909）**明後**/**連翹** 〈函〉

*解説者：古川清彦／佐藤泰正。*多様な作風の 120 篇を収める第一詩集で、「音楽的象徴的な調べ」による「感傷と感覚のすぐれた一体化」は、「半年前に出た北原白秋の『邪宗門』（明 42. 3）とあいまって、詩壇に近代的な新風をまき起した」。*製本途中でドイツ製の赤クロスが足りなくなり、国産の青クロスで間に合わされたりしたが、今回複製されたのは赤表紙本のほうであった。*参考：露風が新潮社から改版しようとの思いで遺した自筆稿本が、生誕百年を記念して 1989 年 4 月 1 日に霞城館（兵庫県龍野市）より家森長治郎執筆の解説（10 頁）と共に複製された（1,500 円。500 部限定版は税込 15,000 円）。

水原 秋櫻子（1892－1981）：

本名豊。号憲雨亭。

□ 『**葛飾**』（馬酔木^{あしび}發行所，昭和 5 年 4 月 1 日：1930）**昭和**/**連翹** 〈函〉

*解説者：楠本憲吉／能村登四郎^{のむら}。*馬酔木叢書、第 4 編。大正 11 年（1922）～昭和 4 年に詠まれた 539 句を収録して、秋櫻子にとっては第二句集になるが、能村によると、本人の頭の中では第一句集と位置付けられていたらしい。また、作品を四季に分けたのち、別に連作の部を立てた編集も斬新であったらしい。「序」が「俳句に志してから五年の間は殆ど心を無にして自然に接することをつとめた。然る後自然描寫の上に如何にして感情を移すべきかに心を勞しはじめた」と記しているように、当時主流の客観写生から抒情の回復を彼は目指していた。*装幀：村田勝四郎。初版 500 部は 4～5 日で完売になった由である。

宮崎 湖處子（1864－1922）：

本名八百吉。号愛郷學人など。

□ 『**抒情詩**』（民友社，明治 30 年 4 月 29 日：1897）**明前**/**連翹**

*解説者：関良一／福田清人。*6 名の詩人が「新体詩を純化」させようとした作品集で、**國木田獨步**が取りまとめた。『日本近代文学図録』（1964）によると、『國民の友』の第 347 號（同年 5 月 8 日）に「抒情詩は眞情の聲なり」と謳った本書の広告が載っているそうである。*装幀・挿画：和田英作。*1964 年 12 月 20 日には、冬至書房が^{ほうじん}近代文藝復刻叢刊。として、矢野峰人による

別冊解題（17 頁）を添えて 350 部を複製（1,000 円）していた。

宮澤 賢治（1896－1933）²²：

□ 『風の又三郎』（羽田書店，昭和 14 年 12 月 20 日：1939）

児① 珠⑨ 児選 〈函〉

＊解説者：山室静。＊「この本を読まれた方々に」を巻末（pp. 235－60）に寄せた坪田譲治によると、横光利一が働き掛けて文圃堂が刊行した『宮澤賢治全集』全 3 巻（1934～35）が呼び水となって賢治の作品が読まれるようになったらしい。²³ それで、この童話集は没後出版のうちでも後発の方であった。しかし収録の 6 篇には、「有機的な汎神論的自然観がよく現われていて、絶好の賢治童話入門作」が含まれていると評判になり、とりわけ彼の童話作家としての功績が認知される機縁となった。＊挿絵その他は小穴隆一による。＊原型的な「風野又三郎」も筑摩書房版全集であれば第 8 巻（1973 年 9 月 15 日）の pp. 5－46 で読める。＊参考：1983 年 10 月 1 日に筑摩書房が『校本宮澤賢治全集 資料篇』の第 4 巻として「セロ弾きゴーシュ」の原稿全 32 葉を原色複製しており、入澤康夫は文字の色合いから原稿に 5 層構造を捉えて別冊解説（36 頁）で図解している。但し『資料篇』は全 5 巻セットで 45,000 円。

□ 『グスコー・ブドリの傳記』（羽田書店，昭和 16 年 4 月 20 日：1941）

児② 〈函〉

＊解説者：山室静。＊8 篇の童話を収め、前付には没後発見の詩「雨ニモマケズ…」が掲載されている。賢治の童話は「理想の世界でもある夢幻境を、想像の力で描きだし」ており、「近代文学が一般に凡人の文学、煩惱の文学であるのに対し…救世の悲願に立つ聖者の文学」を体現させていた。それでいて抹香臭くないのが魅力で、彼の童話は郷土色の濃い「風の又三郎」、ユーモアを含んだ「注文の多い料理店」のような風刺物、そして「グスコー・ブドリの傳記」

²² 山内修（編著）『年表作家読本 宮澤賢治』（河出書房新社，1989 年 9 月 28 日）が、賢治の生涯に沿って情報を並べているため、門外漢の筆者（藤井）には取っ付きやすい。

²³ 没後の賢治への注目～文圃堂～十字屋による全集発刊前後を草野心平が『宮澤賢治全集』第 10、7、3、9 巻（筑摩書房，1956 年 4～7 月）の月報第 1～4 号で回顧している。

や「銀河鉄道の夜」²⁴といった倫理性豊かな物語の三系統に分類されているようである。＊横井弘三の装幀と挿絵は民芸調の味わいを本書に醸している。

□ 『注文の多い料理店』（盛岡：杜陵出版部&東京光原社、

大正 13 年 12 月 1 日：1924）〔大正〕〔新選〕〔珠⑨〕〔SONY〕〔CatH〕

＊解説者：恩田逸夫／福田清人／入沢康夫／栗原敦。＊盛岡高等農林学校（現岩手大学農学部）卒業の賢治にとって、実家近くに新設された稗ひえぬき貴農学校（大正 10 年創立→12 年岩手県に移管後花巻農学校）で農業科や英語を教えた 4 年半が最も充実した文学活動期であった。＊本書は、彼がドリームランド視した岩手をエスペラント風に訛らせて「イーハトヴ童話」^{つのがき}を角書にして 9 篇を収め、「これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません。」（序）との思いを込めて出版された、生前唯一の童話集であった。＊装幀と挿画は菊池武雄。初版は定価 1 圓 60 銭で 1,000 部印刷、印税代わりに賢治が 100 部を受け取った。しかし売れ行きが極めて悪く、その後更に 300 部を買い取った。

□ 『春と修羅』（關根書店、大正 13 年 4 月 20 日：1924）

〔大正〕〔精選〕〔紫陽〕〔珠⑨〕〈函〉

＊解説者：中村稔。＊郷里花巻での自費出版ながら、東京の關根書店から販売した、生前唯一の詩集。揮毫者に遠慮して背表紙に「詩集。という角書を残したものの、賢治は自らの口語自由詩を「心象スケッチ。（扉でスツケチと誤植）と呼んでいた。奥付頁の裏には正誤表が印刷されているが、更に数十件の誤植が指摘されている。そうした誤植の訂正や加筆が多くなされた手沢本が没後に発見されており、全集や流布本の『春と修羅』はこの書き入れ本から本文が採られるようになった。それに対して今回は真つ更の初版本が複製されたので²⁵、流布本との「対比はおそらく宮澤賢治の創作の鍵」に迫る糸口になるとの期待を抱かせる。例えば筑摩書房版『校本宮澤賢治全集』の第 2 巻（1973 年 7 月 15 日）には、入沢康夫と天澤退二郎による詳細を極めた「校異」（pp. 259－419）が収

²⁴ 文圃堂版全集の第 3 巻（1934）が初出であったので、初版本として複製されなかった。

²⁵ 「鉛筆字が製版技術的に困難」で手沢本の複製は断念されたと『作品解題』に説明あり。

録されている。＊背文字は尾山篤二郎で、表紙絵は廣川松五郎。定価 2 圓 40 銭で 1,000 部が印刷されたが、500 部を預かった關根書店がほとんどをゾッキ本に流してしまったため、夜店では 5 銭で売られていたらしい。＊更に『春と修羅』では、第二集の編集が了えられており、構想は第三集までであったので、本書を『第一集。と呼ぶことがある。＊日本図書センターが 1999 年に『愛蔵版詩集シリーズ』で「初刊のデザインの香り」を新字体で再現しようとした。＊要注意：ほるぷ出版の『日本の文学。(1985) は複製本ではない。

宮原 晃一郎 (1882－1945) :

本名知久。

□ 『龍宮の犬』(赤い鳥社, 大正 12 年 5 月 5 日 : 1923) 赤い鳥

＊解説者：木俣修。＊北欧文学の翻訳を手掛けてきた宮原が、主として『赤い鳥』に発表してきた日本の昔話風な 12 篇を集めた書。序文には、「みな母に私が聞いて、それをあなたがたに面白いやうに、書き直した」とある。＊『赤い鳥の本、シリーズは、関東大震災により、この 13 冊目で中断してしまった。

宮本 百合子 (1899－1951) : ^{ちゅうじょう}旧姓中條, 本名ユリ。荒木茂と離婚。宮本顕治と再婚。

□ 『伸子』(改造社, 昭和 3 年 3 月 3 日 : 1928) 昭和精選 〈函〉

＊解説者：本多秋五。＊近代の自我に目覚めた女主人公が、結婚に伴う束縛を断ち切って精一杯生きようとする自伝的長篇小説ながら、いわゆる『ナップの時代。が始まろうとするタイミングで登場したのが禍して、江口渙から「プチ・ブルどもの夫婦別れの小説」と扱き下ろされた。しかし本多は、「漱石が果たそうとして果し得なかった本格的な社会小説」の側面を模索した作品と評価する。＊作者名は中條と印字。裏表紙に[中川 一政]／[野村 [千春?] 刀 [彫?]]の記名あり。＊要注意：ほるぷ出版の『日本の文学。(1985) は複製本ではない。
＊ NAPF については中野重治の項目を参照。

三好 達治 (1900-64) :

□ 『測量船』(第一書房, 昭和 5 年 12 月 20 日 : 1930) 昭和新選／山茶 〈函〉

＊解説者：村野四郎 / 中村稔。＊『今日の詩人叢書。—Ⅱ。過去の成果のみな

らずプロレタリア詩など当時進行中の詩壇の活動を批判しながら、現代詩の将来性を「測量。しようと達治が大正15年（1926）いらい『青空』や『詩と詩論』などに発表してきた約100篇のうちから39篇を自選した第一詩集。＊朔太郎や犀星の流れを汲んで、感触の冷たい情緒の底に「不安に色どられた孤独、虚無感をおびた懷疑」を沈潜させていて、本書が「昭和初期にはじまる新しい抒情精神を代表する名詩集」たるに相応しいと村野は解説する。＊如何にも第一書房らしい重厚な装幀で1,000部が発行された。＊1971年12月20日に冬至書房が、石原八束執筆の別冊解説（8頁）を添えた増補版を刊行（600円）して、今日ではそれが定本とされている。＊日本図書センターが2000年に「愛蔵版詩集シリーズ」で「初刊のデザインの香り」を新字体で再現しようとした。＊要注意：ほるぷ出版の「日本の文学」（1985）は複製本ではない。

むくはとしゅう

椋 鳩十（1905-87）：

本名久保田彦穂。

- 『動物ども』（三光社，昭和18年5月10日：1943）児②児選 〈ジ〉
 ＊解説者：大藤幹雄。＊「近づいて行けば行くほど、「心なき鳥獣」と一口にはいつてしまへないやうな、彼等の生活ぶりにぶつかつて、心をうたれるやうなこと」（序）にしばしば遭遇した鳩十は、それを15篇の物語にして本書に収め、日本の動物文学の創始者、いわば日本のJack London（1876-1916）的作家になった。＊装幀および挿絵は安泰で、初版では6,000部が印刷された。

むしやこうじ

武者小路 實篤（1885-1976）：

筆名無車，不倒翁など。

- 『新しき村の生活』（新潮社，大正7年8月10日：1918）大正 〈ジ〉
 ＊解説者：紅野敏郎。＊Lev Tolstoyの人道主義に心酔してきた實篤は、理想郷の創設を思い立ち、大正7年11月に日向（宮崎）入りして「新しき村」の建設に着手し、大正末まで関わった。本書はそれへの思いを綴った対話や雑感の集で、この時点における「武者小路のすべて」（紅野）が集約されている。
- 『或る男』（新潮社，大正12年11月28日：1923）精選 〈函〉
 ＊解説者：稲垣達郎。＊子爵家の第八子に生まれた實篤が、日向（宮崎）に「新しき村」を建設する頃までの半生を身辺にも触れながら描き出していった、彼

にとっては最長の作品。自伝的ではあっても、「己を歪曲しようとする姿勢」を厳に慎んでいたために、『或る男』は彼の代表作となり得たばかりか、近代文学における屈指の自伝小説でもあるとの太鼓判を押された。

- 『お目出たき人』（洛陽堂，明治44年2月13日：1911）

明後新選 / SONY 〈ジ〉

*解説者：稲垣達郎／紅野敏郎。*稲垣によると、「お目出たき人」は、気取りを排して率直に語る「私」を介在させたことにより、薄暗いとされる「自然主義とはまったく異質の世界を打ち出して…日本の近代文学史上のひとつの記念碑」的作品となった。また「附録」の小品5篇については、「お目でたき人」の「主人公の書けるものとして見られたし」と中扉で添え書きされている。*白樺叢書の一冊。装幀は共に『白樺』を創刊した仲間の有島生馬。*複製に用いられた底本は市販本なので、p.53に3箇所の欠字（手淫）がある。*要注意：ほるぷ出版の「日本の文学」（1985）は複製本ではない。

- 『カチカチ山と花咲爺』^{オランダ}（阿蘭陀書房，大正6年10月28日：1917）

児① 〈函〉

解説者：紅野敏郎。「子供がこの芝居を見て芸術的の興奮を心に感じてくられなければ失敗だ」という意気込みで執筆されたうえに、お伽噺でお馴染みのキャラクターたちにも斬新な解釈が織り込まれている童話劇。初めての児童書であったが、亀井勝一郎がかつて「偉大なる幼児」に喩えた實篤であればこそ本書であった。*挿絵と挿画は岸田劉生による。

- 『その妹 愛慾』（1915～26；ほるぷ出版，昭和47年12月1日：1972）

自選 〈函・ジ〉

*解説者：本人（巻末）・小田切進・稲垣達郎・鈴木信太郎。*大正4年（1915）に「書きながら随分泣いた」記憶がある戯曲なので、米寿になった「今でも愛着」を覚える『その妹』の第一幕に今回少し筆を入れて、それに大正15年執筆の戯曲『愛慾』と『ある畫室の主人』をいっしょに収める。*題字は著者の揮毫で、装幀は親友の鈴木信太郎による。B4横判の豪華本で、随所に兩人の描いた挿絵が貼り込まれて目を愉しませるが、何しろ重量が2.5kgもあるのでデスクに向かって居ずまいを正した拝読を要する。

- 『無車詩集』（京都：^{こうちょう}甲鳥書林，昭和16年4月3日：1941）〔連翹〕 〈函〉
 ＊解説者：稲垣達郎。＊東京の日向堂から出版されていた如何にも實篤らしい『詩集』（1930）にその後の自由詩55篇を加える。「何か自分の言ひたいことを端的に，直接法的に言つて…自分の声で歌つてゐる」と自身で納得しているので，実質的にも全詩集であつたろう。既に「成熟してきた彼の画業と十二分に融合して」おり，稲垣の『お目出たき人』評を借りるならば，「自然な，心持にそのままな，装飾や気取りとは完全に無縁な，文字通りの新鮮な表現」（〔明後〕p. 101）をこの詩集で実践していたのではなからうか。＊自装本。同年3月30日に和綴じの愛蔵版が30部（頒価20圓）作られていたが，〔連翹〕では4月3日発行の上製本（2圓80銭）が原本にされた。本文の各頁に蕪の模様が薄い朱色で入れられている。4月15日には模様無しの並製本（1圓60銭）も発売された。＊日本図書センターが2006年に『愛蔵版詩集シリーズ』で「初刊のデザインの香り」を新字体で再現しようとし，全頁に蕪の模様を薄墨で入れている。
- 『友情』（以文社，大正9年4月20日：1920）〔秀選〕 〈函〉
 ＊解説者：福田清人。＊建設中の『新しき村』で執筆された，油の乗りきった時期の作品。「若い時失恋の名人であつた」實篤が，「恋する事で若い魂を向上させる姿」を若い村民たちに示そうと，特段のモデルも無く素材となる事実も無いままに想像力を駆使して執筆した失恋物語であつた。結局それが彼の「一番広く読まれてゐる」作品となつたようである。＊装幀や扉絵などは岸田劉生による。＊要注意：ほるぷ出版の『日本の文学』（1985）は複製本ではない。

村上 鬼城（1865－1938）：

旧姓小原，本名莊太郎。

- 『鬼城句集』（中央出版協會，大正6年4月17日：1917）〔紫陽〕
 ＊解説者：楠本憲吉。＊高崎の地から『ホトトギス』を介して子規に師事してきた鬼城は，貧困の中で「老」や「死」を対象化することによって，自己の『境涯』をうたいあげて，独自の境涯俳句を確立させた。収録の1,063句を校閲した大須賀乙字は，鬼城の「写生の技術の卓拔さを強調するとともに，感情移入の切実さを説いた」虚子の論文を「序」に転用した。また当時の，「子規の発掘した蕪村に代わり一茶がとりあげられるという状況」変化も追い風になって，

一茶と酷似した彼の作品は注目されるようになった。＊装幀は平福百穂^{ひゃくすい}による。

村野 四郎（1901－75）：

□ 『體操詩集』（アオイ書房，昭和14年12月20日：1939）山茶 〈ジ〉

＊解説者：原崎孝。＊ドイツ新即物主義運動を取り入れて，国内の昭和10年頃までの新詩運動を超えようとしていた村野の第二詩集。19篇の詩に，「肉体と精神の美しい交叉点を詩の造型の上に現そう」と16枚の写真を配した，日本初の photo illustrated poems の試みであった。彼は本書で初出時の本文に大幅な加筆を施したらしいが，原崎は作品名の改題対照表（p. 161）を掲げている。＊写真：北園克衛^{かつえ}。装幀：栗木幸次郎。500部しか印刷されなかったが，表紙に3通りの色違いがあるらしい。＊1970年9月30日に名著刊行会が『稀観詩集復刻叢書』全10点（セット価5万円）のなかで本書を複製していた。＊日本図書センターが2004年に『愛蔵版詩集シリーズ』で「初刊のデザインの香り」を新字体で再現しようとした。

室生 犀星（1889－1962）：

本名照道。

□ 『愛の詩集』（感情詩社，大正7年1月1日：1918）石楠 〈函〉

＊解説者：山室静。＊52篇を収める第一詩集であったが，第二詩集『抒情小曲集』に収録された以降に執筆された作品が多かったので，『日本近代文学図録』（1964）が指摘するように，詩風も「従来の文語調をすて，平明な口語調」（p. 280）に移っていた。内容的にも「さりげない日々の生活の中に見出した喜びを歌い，時にさびしさを感じて明日を待ち望んで自らを慰めている姿」を描いて，第二期に近い作品と山室は解説する。＊本書は，萩原朔太郎と共同経営していた感情詩社から自費出版された。序：犀星，朔太郎，白秋。跋：犀星，朔太郎。装幀：恩地孝四郎。挿絵：恩地，清水太郎。＊ちなみに，1919年5月5日に『第二愛の詩集』（文武堂書店）が続き，1920年8月20日に『愛の詩集』（聚英閣）が再刊された。＊初版・復原版。を大和書房が1966年2月5日に1,000部頒布（1,200円）したが，その際冬至書房が「再現の遺憾なきを期し」て纂修し，中野重治が解説（4頁）を執筆した。＊日本図書センターが1999年に『愛蔵

版詩集シリーズ、で「初刊のデザインの香り」を新字体で再現しようとした。

- 『抒情小曲集』（感情詩社，大正 7 年 9 月 10 日：1918）**〔大正〕****〔連翹〕** 〈函〉
 ＊解説者：中野重治／奥野健男．＊文語による自由詩を集めるが、「少年期から青年期へかかる時期のかけがえのない表現」になっているため，第二詩集でありながらも内容的には『愛の詩集』に先立つことになる．『日本近代文学図録』（1964）は、「激情のうちに切実な寂寥感や思慕の情が漂い，素朴可憐な抒情の世界を確立」（p. 280）したと解説．＊生涯「双児の兄弟」のような関係を保った朔太郎や白秋にも序文を求め，装幀は廣川松五郎が，扉絵・カットは恩地孝四郎が担った．＊犀星はこの第二詩集後に芥川と親しくなり，「猛烈な勢いで小説を書き出した．＊1968 年 10 月 10 日に冬至書房が「初版・復原版」を，工藤信彦の解説（8 頁）を添えて 1,000 部を頒布（1,200 円）した．
- 『性に眼覚める頃』（新潮社，大正 9 年 1 月 5 日：1920）**〔特選〕** 〈函〉
 ＊解説者：和田芳恵．＊「『愛の詩集』や『抒情小曲集』と地続きの思考と感性による散文」で綴られて「幼年時代から青春彷徨を経て若い詩人の苦悩を示した自伝的な短篇小説集」に仕上がっており，結局本書が彼の文壇への出世作になった．＊参考：2011 年 10 月に日本近代文学館が DVD 2 枚で公刊（45 万円）した『滝田樗陰旧蔵近代作家原稿集』に自筆原稿が収録されている由．
- 『動物詩集』（日本繪雑誌社，昭和 18 年 9 月 5 日：1943）**〔兎②〕** 〈ジ〉
 ＊解説者：新保千代子．＊観察眼と季節への感性を研ぎ澄まして，大は白熊や馬から小は^{ほうふら}緋目高や子子に至るまで，生きとし生けるものを特異な視点から捉えた 72 篇の詩が春夏秋冬に分けて収録されている．＊友人恩地孝四郎らしい装幀と童心に訴える挿画も得られて，恩地なくしては「犀星の童話・童詩の出版は考えられないくらい」の取り合わせで本書が実現することになった．それ故にであろうか，奥付には 60,000 部印刷とある．＊「わくわく！名作童話館」（日本図書センター，2006）での復刻は文字遣いや装幀が現代化されている．

森 鷗外 (1862-1922) :

本名林太郎、諱源高湛、^{いみな たかやす}号鷗外漁史、^{せんだ}千朶山房主人、觀潮樓主人など。

□ 『うた日記』(春陽堂, 明治 40 年 9 月 15 日: 1907) 特選 / 石楠 〈函〉

*解説者: 三好行雄 / 長谷川泉。*日露戦争で明治 37 ~ 39 年に満州へ派遣された時期に雑誌や書簡で鷗外が詠んできた作品、すなわち長谷川が数えるには、新体詩 55 篇、長歌 12 首、旋頭歌 4 首、短歌 326 首、俳句 172 句、それにドイツとハンガリーの戦争詩を邦訳した 9 篇と、多様な陣中吟を集成した詩集。
*更に、葦原緑子・久保田米斎・寺崎廣業等による挿絵を 46 葉も綴じ込んでいる。また『日本近代文学図録』(1964) は、本書を「死を怖れぬ日本人の特性を認めた珍しい戦争文学」(p. 257) であると紹介している。

□ 「於母影」(民友社, 明治 22 年 8 月 2 日: 1889) 連翹^付 / 珠⑤

*解説者: 瀬沼茂樹 / 久保忠夫。*旬刊誌『國民之友』の第 5 卷 58 號「附録藻鹽草」から「於母影」の部分 (pp. 45-60) を複製したもの。*寄稿を求められた鷗外が、落合直文らと新聲社を結び、近代詩の草創を目指して啓蒙のため訳出した詩 17 篇を集める。各原作と訳者名を瀬沼も久保もリストにしている。また、藤村の『若菜集』(1897) にしろ晩翠の「謫居」(1893) にしても、「「於母影」以後の新体詩で「於母影」と無縁というものはまずないといって過言ではあるまい」と、久保は本書の影響力が如何に甚大であったかを教える。
* 1963 年 9 月 25 日に冬至書房が「近代文藝復刻叢刊」として、関良一による解説と校異の別冊 (36 頁) を添えて、300 部を 650 円で、また学生版を 350 円で頒布した。

□ 『雁』^{がん}(初山書店, 大正 4 年 5 月 15 日: 1915)

明後 新選 / 珠⑤ / SONY 〈函〉

*解説者: 成瀬正勝 / 桶谷英昭 / 森まゆみ。*成瀬によると、鷗外が反自然主義の立場を論難するに留まらず作品を通して表明するようになった後期の時代に属する長篇小説。『日本近代文学図録』(1964) は、「単行本にするにあたり、終の三章を書き加えて完結。鷗外の全作品中、もっとも小説らしい小説。」(p. 261) と解説し、桶谷も、本作は小説として完結しているだけに「小説の中から思想問題を抽出して論じる向きには、まことに論じにくい、論じ甲斐のない

小説」とぼやく。＊口絵は横山大観。＊**明後**は目に鮮やかな青色絹布張りの表紙に金箔押しが施された原本から複製したが、**新選**以降は赤絹表紙本を原本にしている。＊要注意：ほるぷ出版の『日本の文学』（1985）は複製本ではない。

- 『沙羅の木』（^{オランダ}阿蘭陀書房、大正4年9月5日：1915）**山茶****珠⑤** 〈函〉
＊解説者：竹盛^{てんゆう}天雄。＊訳詩集「於母影」と陣中吟『うた日記』に続いて、鷗外にとっては最後の詩歌集。様式が異なり関連し合わない「譯詩」「沙羅の木」「我百首」の三部構成になっているが、竹盛によると、「詩人鷗外の仕事としては、むしろ最も純乎たる性格をあらわしている」由である。＊装幀：北原白秋。

- 『青年』（^{ぎょう}靑山書店、大正2年2月10日：1913）**精選** 〈函〉
＊解説者：澁川^{ぎょう}驍。＊『三四郎』（1909）の小川三四郎のモデルとされる小宮豊隆と、鷗外が同様の青春小説を試みた『青年』での主人公小泉純一のモデル柏木純一は、共に豊津中学校（現福岡県立育徳館中・高校）での同級生という繋がりが興味深い。＊橋口五葉が装幀した胡蝶本（脚注13参照）の一冊。＊独立した著作集の複製が計画された1973年の日本近代文学館理事会では鷗外集は挙がっていなかった。結果的には、文学館とほるぷ出版は鷗外の初版本を7点複製したことになるが、『青年』だけは**精選**セットでのみ複製された。

- 『即興詩人』上・下（春陽堂、明治35年9月1日：1902）**明前****秀選** 〈ジ〉
＊解説者：山室静。＊Christian Andersenの半自伝的旅行記 *Improvisatoren* (1835) を鷗外が、若き日の原作への憧れを思い起こしながら「悠々と典雅な筆致」で訳出して、むしろ原作を凌駕した邦訳と評されてきた。山室は、「明治浪漫文学の最も早い、そして最も清新にして豊麗な収穫」と絶賛している。

- 『東京方眼圖』2冊（春陽堂、明治42年8月15日：1909）
特選^付**珠⑤** 〈ジ〉
＊解説者：稲垣達郎。＊縦軸に「一」～「十一」が、横軸には「い」～「ち」の座標が入れられた1枚の東京全図と、横軸の8区分で切り分けられた縦長の地名索引付き地図帳のセット。＊陸軍軍医たる森林太郎が思い着きそうな便利グッズで、自作『青年』の主人公にもそれを片手に東京を歩かせている。＊折り畳まれた全図は袋に入れられ、地図帳もジャケットを被せられていたが、実用品だったのでどれも汚損が進んで、ジャケット付きの複製は刮目に値するら

しい。＊参考：出久根達郎（2007）に「方眼図の発明」（p. 296－308）。

文部省：

2001 年から文部科学省。

□ 『教訓假作物語』（國定教科書共同販賣所，明治 41 年 3 月 16 日：1908）

兎②

＊解説者：滑川道夫。＊明治 36 年に教科書が国定化され，文部大臣官房圖書課は「高等小學讀本ノ材料トシテ懸賞募集」（緒言）を行った。応募作のうち 14 篇が入選し，^{いわずさなみ}巖谷小波が補筆を施して全 203 頁に編纂された短篇小説集。

□ 『小學唱歌集』初編（文部省，明治 14 年 11 月 24 日：1881）兎①^付〈和〉

＊解説者：^{たまお}藤田圭雄。＊文部省音楽取調掛伊澤修二（1851－1917）による編集。通りの良い角書込みの書名で立項した。＊「君が代」を含む 33 曲は歌詩が雅語調で旋律に乗りにくかったが，主にドイツ楽曲に由来するメロディの美しさが与って本書は好評であった。それで民間でも「唱歌集が作られ，明治の音楽教育は唱歌の中から完成」されていく方向性が定まった。＊楽譜は無修正のまま文部省の審査に合格したが，やはり歌詞には横槍が入って，配本が翌 1882 年に遅れた。第二編（1883）と第三編（1884）も引き続いて発行されている。

八木 重吉（1898－1927）：

□ 『秋の瞳』（新潮社発行の私家版，大正 14 年 8 月 1 日：1925）紫陽

＊解説者：佐藤泰正。＊無教会主義に傾いたクリスチャンであった八木は，東京高等師範学學校を卒業した英語教師として英詩人 John Keats（1795－1821）や William Blake（1757－1827）を愛好し，「自分の究極においては，子供のような詩をのぞんでい」たらしい。そんなふうで，明治の象徴詩に親しんだり，**中原中也**ともども「最も柔軟な詩語の肉質をその詩法の軸」にしてきた。その彼が大正 10～13 年に執筆した作品から「簡潔で凝縮」の利いた 117 篇を自ら選んで生前唯一詩集にまとめた。＊日本図書センターが 1999 年に『愛蔵版詩集シリーズ』で「初刊のデザインの香り」を新字体で再現しようとした。

柳田 國男（1875－1962）：

旧姓松岡。

□ 『遠野物語』（聚精堂，明治43年6月14日：1910）**明後****秀選**

＊解説者：山本健吉。＊遠野郷（岩手県）の生活伝承を，「不思議な伝承型の才能の持主」であった佐々木鏡石（^{きげん}喜善）から聞き書きした集。山本は，「学問の処女地に始めて鋏を入れようとする少壮時代の氏の，学問的好奇心と昂奮との渦」が柳田の簡潔な文語体から伝わってくると解説する。また，中扉の献辞「此書を外國に在る人々に呈す」の背後に「日本の土に生きる日本人の原初的な心情，信仰の形を，異国に滞在する日本人たちに，半生の資としてことに読んでもらいたかった」との思いを山本は想像する。＊実質的には私家版で，初版は並製350部であったが，日本民俗学の黎明を告げる記念碑的著作との評価を得て，1935年7月には4倍に近い頁数の増補版が郷土研究社から刊行された。

山川 登美子（1879－1909）・増田 雅子（1880－1946）・與謝野 晶子：

本名山川とみ。本名増田まさ，結婚して茅野。晶子については後述。

□ 『戀衣』（本郷書院，明治38年1月1日：1905）**連翹** 〈ジ〉

＊解説者：石丸久。＊『明星』で王朝趣味を醸し出してきた女流3歌人による詩歌集で，本書の前半に山川が短歌131首と増田が113首，後半部には**晶子**が148首と「君死にたまふことなかれ」を含む6篇の詩作品を寄せている。山川にとっては本書が生前唯一の歌集であった。＊装幀と挿絵は中澤弘光による。

山口 誓子（1901－94）：

本名新比古^{ちかひこ}。□ 『凍港』（^{そじんしゃ}素人社書屋，昭和7年5月15日：1932）**山茶** 〈函〉

＊解説者：飯田龍太。＊「跋」によると，1926～28年に「傳統俳句を乗り越えた」として，1930年に「連作の形式によつて，新しい「現實」を，新しい「視角」に於て把握し，新しい「俳句の世界」を構成せんとしつゝある時期」を迎えてから試行的に詠んできた作品300句を本書に集める。誓子にとっては第一句集で，「序」を高濱^{たか}虚子が寄せている。『近代文学名作事典』（1967）で楠本憲吉が評するには，「新興俳句運動の精神的拠点となった書」であった。＊誓子は，「初版の年代別作句配列を連作体に改め，それぞれに表題を付し」た沙羅書店版『凍

港』(1936)の方を決定版としたが、それでも「『凍港』の新しさを知るには、その時代背景と俳諧史的背景に精通する必要」(楠本)があるらしい。

山田 美妙 (1868-1910) :

本名武太郎。号樵耕蛙船、飛影。

□ 『夏木立』(金港堂, 明治21年8月20日: 1888) **特選**

*解説者: 塩田良平。*美妙は幼なじみの紅葉と学生時代に硯友社を結び『我樂多文庫』を編輯した。その誌上で言文一致を試みたことから、二葉亭と並んで美妙も口語体小説の創始者と目されている。初めて彼が注目された前年の「武藏野」や、W. Shakespeareを素材に書き下ろした「籠の俘囚」など6篇を収めた本書により、彼は文壇の寵児になった。*見開きと挿画は尾形月耕。*好評にあやからうと版元が『夏木立』叢書を始めたが、不首尾に終わった。

山村 暮鳥 (1884-1924) :

本名志村八九十 → 木暮 → 土田。筆名木暮流星。

□ 『聖三稜玻璃』(にんぎょ詩社, 大正4年12月10日: 1915) **紫陽** 〈函・挿〉

*解説者: 小海永二。*キリスト教伝道師らしい「宗教的な神秘性と鋭角的な光の印象」の鮮明な35篇を選りすぐった第二詩集は、「『月に吠える』に先んじて、幻視的表現を詩界に提出した」ほどに革新的であったが、難解なうえに「大正期における最大の詩派で平易な民衆詩派の運動の起こりつつある時期」の刊行という早過ぎた登場に災いされて、非難される場面が多かった。*国会図書館が『せいブリズム』と読んでいるのは犀星の序文「聖おりずみすたとに與ふ」に依ったようである。*装幀は犀星と廣川松五郎。おそらく50部限定の特製本(売価5圓)はスウェード装で、印字された8葉の薄片が挿み込まれている。同時に紙装の並製本も販売されており、『解説』(pp. 163-64)が仕様の違いを記述している。***紫陽**は特製本をスウェード装も薄片も忠実に複製している。*同じ『聖三稜玻璃』でも、草野心平が編集した十字屋書店版(1947)は別編成の詩集であり、大雅洞版(1973)も造本を異にする別本のようなのである。

□ 『ちるちる・みちる』(洛陽堂, 大正9年8月25日: 1920) **兎①** **兎選**

*解説者: 続橋達雄。*ベルギーの詩人 Maurice Maeterlinck (1862-1949)を超える意気込みで執筆された教訓的な第一童話集。「真の詩」たる童謡を童

話の領域に抜け得た寓話風な 36 篇を集めていたが、キリスト教徒でありながら放蕩を尽くした暮鳥にとっては「生命への讃歌」（内容見本）でもあった。

山本 有三（1887－1974）：

本名勇造。

□ 『新篇 路傍の石』（岩波書店，昭和 16 年 8 月 1 日：1941）

昭和 新選 / SONY

*解説者：高橋健二 / 出久根達郎。*第一部が 1937 年 6 月まで『朝日新聞』に連載されていたが、7 月に日華事変が勃発して朝日が第二部の掲載に及び腰になったので、第二部の連載先が『主婦之友』に移された。ところが山本は、第一部から書き直して「新篇」としてこの教養小説を『主婦之友』の 1938 年 11 月號から再連載し始めた。しかし、「お月さまは、なぜ落ちないか」の章に社会主義者が登場するために内務省から強い干渉が及んで、彼は 1940 年 7 月號で第一部未完のまま執筆を打ち切り、8 月號に「ペンを折る」を発表した。したがって第二部には着手されなかった。*書き直された第一部が 1941 年 2 月に岩波書店の『山本有三全集』の第 7 卷に収録され、8 月には吉田^{きねたろう}甲子太郎の「あとがき」（pp. 595－600）を添えて同じ紙型から『新篇 路傍の石』として単行本化された。それが今回の複製の原本である。*終戦後 1947 年に鱒書房から『第一部』が出されたが、「お月さまは…」より手前の「次野先生」まで（新篇の 4 分の 3 まで）で終わっている。その同じ本文が 1948 年にも新潮社から『路傍の石』として再刊されて、現行版になった。『作品解題』には朝日版 vs 新篇 vs 現行版での章単位の対照関係が表にされている。

□ 『戦争と二人の婦人』（岩波書店，昭和 13 年 4 月 13 日：1938）^{〔見②〕} 〈函〉

*解説者：滑川道夫。*アメリカ南北戦争（1861－65）に深く関わった Clara Barton と Harriet Beecher Stowe を紹介した「はにかみやのクララ」と「ストウ夫人」を収める。後書きには、使用する漢字を 1,300 字以下に制限して、ルビは用いない文体を工夫したとある。もともとは『主婦之友』に連載されたのであったが、読み易さもあって、単行本も青少年層の間に読者を増やした。

□ 『同志の人々』（新潮社，大正 13 年 11 月 15 日：1924）^{〔特選〕} 〈函〉

*解説者：福田清人。*昭和 2 年（1927）に最初の長篇小説『生きとし生ける

もの』(文藝春秋社)を出版するまでの17～18年間、山本は劇作に専念していた。その間の経験が彼の小説に作風上の好影響を及ぼしたが、本書はその頃の戯曲を6本収録する。＊題字・装幀：菅虎雄。＊既に新潮社の『現代脚本叢書』に彼の『阪崎出羽守』(1921)と『生命の冠』(1924)が編入されていた。

- 『無事』(1921～52；はるふ出版，昭和47年12月1日：1972)〔自選〕〈函〉
＊解説者：本人(巻末)・小田切進・土岐善麿・水谷八重子。＊山本のお気に入りなのであろう，「ウミヒコ・ヤマヒコ」(初出1923)は『同士の人々』にも収録されている。他に「兄妹」(初出1921)，「子役」(初出1931)，「ふしゃくしんみょう」(初出1934)，「こぶ」(初出1934)，「無事の人」(初出1949)を収録する。かつて禅僧から「死にべた」と評されて以来の心境を85歳になった山本が振り返った「あとがき」を寄せている。＊題字の揮毫は本人で，装幀は旧友の白井晟一^{せいいち}。但し，山本は挿絵の使用を希望しなかった。

湯淺 半月 (1858－1943)：

よしお
本名吉郎。

- 『十二の石塚』(群馬：私家版，明治18年10月10日：1885)〔特選〕/〔石楠〕
＊解説者：佐藤泰正／浅井清。＊五七調長歌に讃美歌の風味を添えた叙事詩で，明治18年に同志社大學の卒業式で湯淺が参列者に向けて朗読し，同年10月に米国留学へ出発する直前に兄により出版された並製58頁の冊子。書名は『旧約聖書』に語られるイスラエルの12の民族に因むようである。＊二つの大学でPh.D.を得て明治24年に帰国後母校で旧約を講じた。そこには伝統的な「忠臣孝子の義挙」のエトスが色濃いと佐藤は読む。＊「近代詩壇における最初の個人詩集」であったが稀覯中の稀覯な冊子のため，付物の有無も不明なまま。

横光 利一 (1898－1947)：

としかず
本名利一。

- 『機械』(白水社，昭和6年4月10日：1931)〔特選〕 〈函〉
＊解説者：保昌正夫。＊新感覚派から転じて「心理主義即ち人間主義という確信」を求めて，修羅場に追い込まれた人間の心理を描いた8短篇を集める。その延長線上にある『純粹小説論』(1935)において，彼は「「自分を見る自分」として在る「自意識」を写す手法としての四人称の設定」(保昌)を説いたそ

うである。＊本書での仕上がりが良かったこともあって、以後の著作では佐野繁次郎が装幀を任されるようになった。＊横光は、川端康也、堀辰雄、伊藤整とともに昭和文学の「芸術派」を形成することになった。

- 『春は馬車に乗つて』（改造社，昭和2年1月12日：1927）昭和精選 〈函〉
 ＊解説者：保昌正夫。＊象徴的手法により多様な実験を試みた大正13年(1924)～15年発表の短篇小説11作を集める。横光は昭和初期におけるモダニズム文学・表現派文学の代表的存在として、写実に頼る旧派文学やマルクス主義文学とは対峙していた。＊装幀は中川一政による。＊要注意：ほるぷ出版の『日本の文学』(1985)は複製本ではない。

與謝野 晶子（1878－1942）： 本名鳳^{ほう}しよう，結婚して與謝野。

- 『八つの夜』（實業之日本社，大正3年6月30日：1914）兎②
 ＊解説者：瀬沼茂樹。＊『愛子^{あいし}叢書』の第四編。純情な12歳の綾子が神との契約で毎晩変身し、8通りの人生を8日間で体験するという連環体小説もしくは変身小説で、生まれや境遇に拘わらず誠実に生き抜くよう読む者を諭す。瀬沼は、「極めて深く東西の伝統を踏まえて、古風であると同時に、前衛に近い新風をひらいた」、謂ってみれば『八夜物語』になっていると評する。＊晶子は子女の教育にも熱心で、自ら興した文化学院で晩年には学部長を務めた。
- 『みだれ髪』（東京新詩社，明治34年8月15日：1901）明前新選/山茶
 ＊解説者：木俣修／石丸久。＊与謝野寛（鐵幹）の妻になる以前に、「人間性肯定を恋愛への情熱として奔騰させ」る青春浪漫歌を399首集めた詩集であったことを、『日本近代文学図録』（1964）は紹介している（p. 245）。木俣も、「この集は歌壇のみではなく、文壇的な視聴を集めたのであって、「明星」の文学運動に大きく拍車をかける」ほどの歌集であったと解説。年代順でなく内容的まとまりで6部に分けて配列されていた。＊装幀・挿絵ともに藤島武二。＊本書の第三版（1904）になってから鳳を與謝野に改めたらしい。＊1969年4月20日に求龍堂が複製し、政治公論社「無限」編集部が『アントロギア・ポエティカ』として、牛島百合子による別冊解説（81頁）を添えて1,000部を販売（2,200円）している。＊要注意：ほるぷ出版の『日本の文学』(1985)は複製本ではない。

與謝野 鐵幹 (1873-1935) :

本名寛。号^{くしみたまのや}靈美玉廬舎、鐵雪道人など。

□ 『^{あいぎこえ}相聞』 (明治書院, 明治 43 年 3 月 25 日 : 1910) **紫陽** 〈ジ〉

解説者: 武川忠一。 国士的な感覚で「師授と伝統の模倣を否定し、自己の歌を詠むという革新論」を唱えて明治 33 年 (1900) に雑誌『明星』を創刊すると、**鳳** (後に**與謝野 晶子**の他にも**啄木**や**白秋**たちを惹き寄せて、「奔放で華麗なあこがれや空想を追う」浪漫主義短歌の時代を招来した。合わせて鐵幹の歌風も恋愛賛美に移行し始めて、明治 38 年には鐵幹の号を廃して本名である寛を名乗るようになった。『相聞』は寛の第一短歌集で、明治 37 年 (1904) 以降に詠んだ短歌から晶子が 997 首を選び、**上田敏**への献辞と、**森鷗外**による序文を掲載した。一首ずつ手法も題材も多様であるが、「ある種の落莫感・空虚感が、作の内実となって…実に巧緻な技法を見せている」と、武川は解説する。

*装幀・挿画: 高村光太郎。

□ 『**紫**』 (東京新詩社, 明治 34 年 4 月 3 日 : 1901) **明前** 〈和〉

解説者: 木俣修。 「ますらおぶり」を標榜していた鐵幹の歌風が、**鳳** (後に**與謝野 晶子**との恋愛を経て浪漫的抒情に転換したことを反映させていて、謂わば『**みだれ髪**』と一対をなす歌集に位置付けられる。* 大振りの表紙と重ねて二つ折りにしてから背をリボンで綴じただけの斬新な装幀。

吉井 勇 (1886-1960) :

□ 『酒ほがひ』 (昴發行所, 明治 43 年 9 月 7 日 : 1910) **明後** / **連翹** 〈函・挿〉

解説者: 木俣修 / 吉田精一。 伯爵家の次男であった吉井が詠んだ 719 首を収める第一歌集で、木俣は「名門に生まれたものの特に持たなければならぬ重圧にたえられなくなった一種の絶望感に立つて頹廃享樂の世界に漂泊した多感な青年勇の自ら刻んだ肖像」と、一息に本書を総括している。いっぽう『日本近代文学図録』(1964) は「独自のいわゆる勇調が確立されている」(p. 259) と寸評する。書名『酒ほがひ』は酒保買^{しゅほ}いを連想させるが、本文 p. 109 では「^{さか}酒ほがひ」とルビされていた。* 装幀は**高村光太郎**、**木下杢太郎**による口絵・挿絵と藤島武二描くカットを伊上凡骨^{いがみ}が木版に彫った。* 奥付の対向に正誤表の小片が綴じ込まれている。**明後** 制作時には無かった函が発見されて、**連翹**

において函も複製された。＊1946年11月2日には文藝復興社（京都）から300部限定で再刊されたが、「初版本の歌に多くの改訂がほどこされている」そうである。

吉田 ^{いっすい}一穂（1898－1973）：

本名由雄。

□ 『海の聖母』（金星堂，大正15年11月15日：1926）紫陽 〈函〉

＊解説者：篠田一士。＊篠田によると、「サンボリズムの詩の本質を、「魂の状態」の表白にほかならないと断定した、ポール・ヴァレリーのめでたい定義を、真正な日本の詩的言語によって実現したのは、吉田一穂をもって、嚆矢とする」そうである。更に篠田の賛辞をつなぎ合わせると、一穂は「従来の調律に應ずる無意味な且つセンスの希薄な行・聯を否定」して、彼の「執拗な自己研磨」による「詩的創造の求心力のすさまじさ」は「日本近代詩史上、空前」の域にあった。そのため極めて寡作な経歴で通したが、その彼が大正8年（1919）以降に詠んだ自由詩41篇を収録した本書は、処女詩集でありながら既に「日本の詩的成果のなかで、燦然たる光輝を放ちつづける高峰を形づくる偉業」となった由である。＊装幀は龜山巖。＊1973年10月15日に渡辺書店が600部を複製（1,600円）し、「初版誤植訂正表」を複製版奥付の前に綴じ込んでいる。

吉屋 信子（1896－1973）：

□ 『花物語』第一集（洛陽堂，大正9年2月13日：1920）児②児選 〈函〉

＊解説者：尾崎秀樹。＊鈴蘭とか野菊など花にちなむ少女の思い出話が、大正6年から雑誌『少女畫報』に連載され始めると、当時の少女たちが熱狂した。そうした読者のなかには壺井榮もいたらしい。連載は好評続きであったために、大正9年には本書（第1～20篇を収録）および第三集までが、大正13～15年には交蘭社から全五集（全52篇）が単行本化された。＊吉屋がキリスト教の影響を受けていたこと、アメリカの女流作家 L. M. Alcott の *Little Women*（1868－69）に共感してきた経歴に、尾崎は注目している。＊永く読まれたようで、1939年になって實業之日本社が上中下巻に分けて中原淳一（1913－83）の挿画で再刊した。1985年にも国書刊行会が1939版を新漢字と新かな遣いに直

して上中下巻（全 52 篇）で復刊して、それが 21 世紀にも販売され続けた。

若松 賤子（1864－96）： 本名松川^{かし}甲子、通称島田嘉志。巖本善治と結婚後は嘉志子。
筆名は郷里の会津に因み、神に仕える賤の子から。

- 『小公子』前編（女學雜誌社，明治 24 年 10 月 28 日：1891）**明前** 〈和〉
＊解説者：塩田良平。＊彼女は母校（フェリス女學院の前身）で英語を教えていたが、投稿先の『女學雜誌』を主宰していた巖本善治は キリスト教主義の明治女学校の教頭（明治 25 年から校長）でもあったので、彼女はそこへ転任し、明治 22 年に巖本と結婚した。＊本書は、アメリカの女流作家 Frances Burnett の *Little Lord Fauntleroy*（1886）を、原文に対して「敢て一字を増さず敢て一字を損せず」（森田恵軒評）に横浜言葉の「せんかつた調」で邦訳して、明治 23～25 年に『女學雜誌』に発表した。その前半部の単行本が本書である。そして若松が没した翌年に、全訳本が櫻井鷗村の校訂を受けて博文館（1897）から刊行された。＊明治女学校は四半世紀間の活動で廃校になったが、巖本の人脈から透谷、藤村、津田梅子たちを教授陣に擁し、卒業生には野上彌生子がいた。
参考：青山なお『明治女学校の研究』慶應通信 1970 年 1 月 20 日。

若山 牧水（1885－1928）： 本名繁。

- 『海の聲』（生命社，明治 41 年 7 月 18 日：1908）**連翹** 〈ジ〉
＊解説者：武川忠一。＊「文学者として自立していく意識」と牧水らしさが出始めた明治 39～41 年に詠んだ短歌から 475 首を自選した第一歌集で、海と旅について、また園田小枝子との悲恋の相聞歌を集めている。武川が評するには、「どの作も、悲哀と不安と孤独の思いに揺れる、若々しい魂の声」を挙げている歌集で、牧水は流派を立てるというよりも、「白鳥は哀しからずや…」(p. 3) のような愛誦性ある作品によって親しまれる歌人であった。＊序は尾上柴舟、風格ある装幀は平福百穂で、題簽は土岐哀果^{ひやくすい}（善麿）と顔触れは揃っていたが、版元の突然の廃業で、尾上からの資金援助による自費出版となった（生命社の所在地は下宿のこと）。しかし、初版の 700 部はほぼ全冊が売れ残ったらしい。

□ 『別離』^{とうろうどう}（東雲堂書店，明治43年4月10日：1910）〔明後〕 〈ジ〉

＊解説者：木俣修。＊早稻田大学卒業までの『海の聲』と、就職に苦悩した時期の『獨り歌へる』（1910）に収録した作品に、新たに130首を加えて1,004首を収める第三歌集とした。「人生の苦患を自然のなかに放浪することによって払拭しよう」とする彼の初期短歌らしい浪漫性と朗詠性が好評で、民衆に親しまれる歌人としての不動の地位を彼は本書によって築くことになった。＊装幀は石井柏亭で、深緑色のクロスに黒漆塗りと金箔押しに天金と、『海の聲』以来の重厚さを踏襲していて、彼の製本における趣味が想像される。八木福次郎は写真で函を見たいが、現物での存在を確認できていない由である。

—— 2018年6月10日に（Ⅲ）を脱稿——

追 記

前稿（Ⅰ）への補足

- 《p. 3, 下から3行目》複製製作 → 複製制作 ●《p. 15, 最下行文末に加筆》（但し、セットとして箱ごと購入する際には、古書店がジャケットや挿み物での欠損を見落としているかも知れないリスクを負うことになる。） ●《p. 26, 5行目》13点が → 13点がほとんど清水良雄の挿画で ●《p. 33, 脚注》復刻＋五セット → 複製十五万セット ●《p. 45, 下から4行目に加筆》 ➡ 参考：2011年に『DVD版小林多喜二草稿ノート・直筆原稿』が雄松堂より公刊（105,000円＋税）された。 ●《p. 53, 12行目》『水虎晩帰^{すいこばんき}之圖』 → 「水虎晩帰^{すいこばんき}之圖」 ●《p. 56, 9行目に加筆》 ➡ 参考：2014年に『太宰治直筆原稿集 日本近代文学館所蔵』が雄松堂よりDVD3枚で公刊（90,000円＋税）された。
- 《p. 57, 4行目を変更》【価格例】：（8,000円＋税）× 16回 = 128,000円＋税。
- 《p. 62, 1行目》十五セット → 十五万セット ●（Ⅰ）では一部の旧字で表記すべき`青、, `清、, `情、を見落とした。

前稿（Ⅱ）への補足

- 《p. 3, 13行目＊の前に加筆》装幀：工藤信太郎. 挿画：早川桂太郎.
- 《p. 6, 19行目に加筆》＊参考：1972年2月25日に、中央公論社が「河童」(1927)の原稿を、吉田精一筆の解説(8頁)付きで385部複製(13,000円). ●《p. 9, 最下行に加筆》＊装幀：川端龍子^{りゅうし} ●《p. 12, 2行目＊の前に加筆》＊参考：和泉書院版『近代文学初出復刻、のうち村上悦也(他編)『石川啄木集 歌集篇』(1986年5月20日)が、本書と『悲しき玩具』に収録された作品を初出の新聞・雑誌記事から複写する. ●《p. 12, 12行目＊の前に加筆》＊参考：盛岡啄木会が『悲しき玩具 直筆ノート：一握の砂以後』として、手写稿一冊と歌稿一葉を複製し、土岐が初版に付した跋文を転載した観音開きの別紙を添え、1974年啄木忌(4月13日)に1,300円で頒布した. ●《p. 19, 下から11行目に加筆》＊装幀・挿画：久世勇三. ●《p. 19, 下から2行目＊の前に加筆》＊装幀：鍋井克之.
- 《p. 20, 8行目に加筆》＊装幀・挿画：永瀬義郎. ●《p. 24, 7行目に加筆》＊装幀：吉田謙吉. ●《p. 28, 最下行に加筆》＊装幀・挿画は深澤省三および紅子^{こうこ}. ●《p. 29, 15行目＊の後に加筆》装幀：芹澤銈介^{けいすけ}. ●《p. 32, 14行目》『TONKA JOHN』→柳川方言の『とんか じょん、(立派な 坊っちゃん、兄)に由来する』TONKA JOHN. ●《p. 38, 9行目に加筆》＊挿画：伊藤薫^{きさく}朔. ●《p. 40, 1行目に加筆》＊装幀・挿画：朝野方夫^{かたお?}. ●《p. 43, 下から8行目＊の前に加筆》＊装幀：青山二郎. ●《p. 46, 7行目に加筆》＊装幀・挿画：河目悌二^{かわめ}. ●《p. 48, 7行目に加筆》＊函絵・挿画：有島生馬.
- 《p. 50, 下から5行目＊の後に加筆》装幀・口絵：平福百穂^{ひゃくすい}. 挿画：森田恒友.
- 《p. 62, 3行目＊の前に加筆》＊装幀：橋本基^{もと}.

全体への補足

- (Ⅲ)の推敲ちゅうに、日本近代文学館(編)『近代文学草稿・原稿研究事典』(八木書店、2015)から原稿の複製本に関する若干の刊行情報を得ることができた.
- ほるぶ出版は、1975～85年に『日本の詩、という詩人別作品集を数十点出版している. 詩人名を書名にしているので取り違える心配は少なからうが、同社の『文学の世界、同様に、現代版で初版本の複製ではないので念のため付記しておく.

○ 筆者（藤井）は「国立国会図書館デジタル・コレクション」の恩恵に浴しているひとりであるが²⁶、本稿ではコレクション収録の有無に触れなかった。収録状況が刻々変化するし、本稿の趣旨は書物に触れる愉しみを提案することだからである。

○（Ⅰ）～（Ⅲ）を合わせると 500 枚ほどになるが、論考というよりも、68 歳になって「手習い」を始めた元英文学徒にどれくらいのことができたのか、その「お披露目」も兼ねた筆慰みである。論文執筆でのような表記の統一にはこだわらなかったのも、終始リラックスして筆を進めることができた。ために目障りな記述が紛れ込んだかもしれないが、その節にはご寛恕を賜りたい。

○ 校了間際に、本稿（Ⅰ）p. 18 で言及した『日本近代文学名著事典』（ほるぷ出版、1982）についての青山毅による紹介文を『古書彷徨』（五月書房、1989）pp. 221－25 に読んだ。本稿の執筆意図にも通ずるので、遅蒔きながら先行業績へ敬意を表しておきたい。

以上

²⁶ 『福岡大学図書館報』第 130 号（2017 年 1 月）所載の「国立国会図書館の窓口が本学図書館に来た！」でコレクションを紹介した。関心ある向きにはネットで参照されたい。